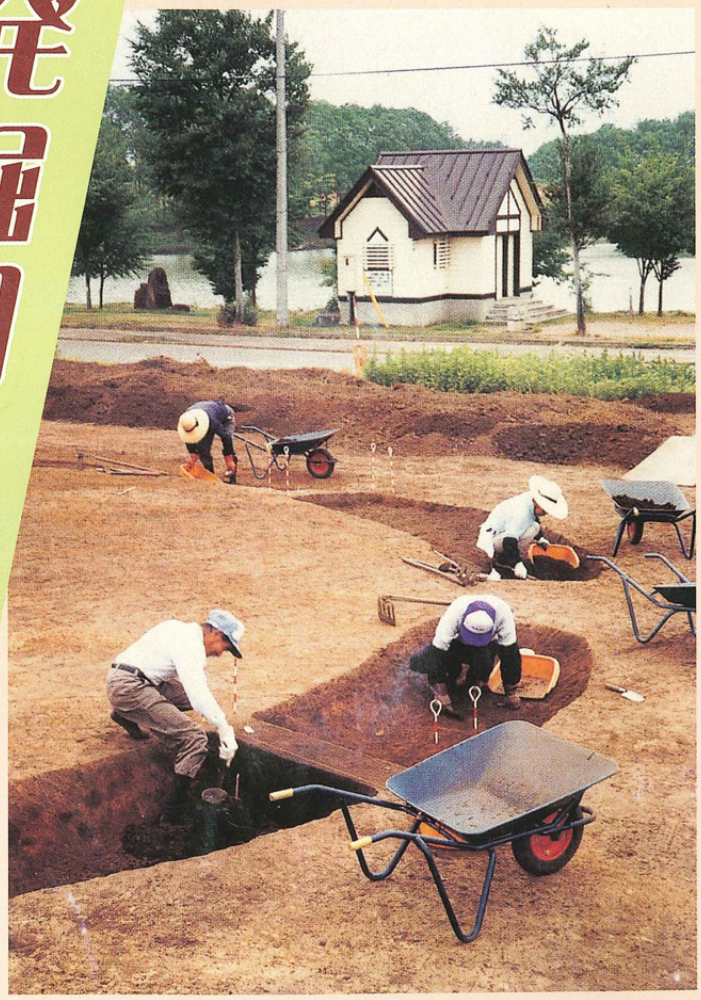
飯山市埋蔵文化財調査報告　第59集

縄文時代の狩猟場跡

針湖池遺跡発掘調査報告書



弥生時代の周溝墓

一九九九年三月　発行
長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第59集

針湖池遺跡発掘調査報告書

一九九九年三月　発行
長野県飯山市教育委員会

例　言

1　本書は、飯山市大字旭字長峰４６３１ほかに所在する針湖池遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、平成10年６月８日より同年７月９日まで、飯山市（建設部都市計画課担当）の依頼を受けた飯山市教育委員会が発掘調査団を編成して実施した。

3　今回の発掘調査によって発見された遺構は、縄文時代（後期と推定）の落とし穴49基（方形土坑11・溝状土坑38)、弥生時代周溝墓４基（方形１・円形３）、遺物には縄文土器片・弥生後期壷・甕・高坏・鉢がある。

4　調査にかかる組織は以下のとおりである。

飯山市建設部都市計画課

課　　長	高橋　俊雄
係　　長	森　　勝
技　　師	渡辺　　毅

飯山市教育委員会（平成10年度）

教育委員長	清水　長雄（～12月25日）	上　原　　脩（12月28日～）
教　育　長	岩﨑　　彌（～12月25日）	清　水　長　雄（12月26日～）
教育次長	井出　澄夫（～12月25日）	石　沢　雄　司（１月１日～）
生涯学習課長	平野　英孝	
社会教育係長	山室　茂孝	
同係　主　査	伊達　信寿	
主　査	望月　静雄	

◎発掘調査団

団　　長	高橋　　桂（飯山市文化財保護審議会会長・日本考古学協会会員）
担　当　者	望月　静雄（飯山市教育委員会事務局職員）
調　査　員	常盤井智行（飯山市埋蔵文化財センター調査員）

◎発掘作業参加者

植中高見・高橋武・岩井伸夫・高橋喜久治・万場義秋・土屋久栄・滝沢きよえ・鈴木操・宮本鈴子
岸田志づ子・伊達信寿（市教委）

◎整理作業参加者

藤沢和枝・桃井伊都子・常盤井智行

5　本書は、高橋桂団長指導の下、藤沢和枝が図面整理・トレース作業を行い、執筆は望月静雄・高橋桂が行った。

6　発掘調査から整理作業にかけて以下の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げる（順不同・敬称略)。

樋口昇一・桐原健・田中清見・中島庄一・吉原佳市・広瀬昭弘・飯山市公民館・同常盤公民館
同外様公民館・同柳原公民館・㈱みすず総合コンサルタント・㈱しな測・（有）大島重機建設

7　発掘調査にかかる遺物・図面等はすべて飯山市埋蔵文化財センター（電話0269-65-3993）にて保管している。

目　次

序　章　針湖池遺跡発掘調査の概要 …… （望月　静雄） 1
第１章　遺跡とその環境 …… 2
　第１節　遺跡の地理的位置 …… 2
　第２節　周辺遺跡 …… 4
第２章　調査の概要 …… 6
　第１節　調査に至る経過 …… 6
　第２節　調査経過 …… 6
　第３節　調査の概要 …… 8
第３章　発見された遺構と遺物 …… 11
　第１節　縄文時代 …… 11
　　１　遺構 …… 11
　　２　遺物 …… 24
　第２節　弥生時代 …… 25
　　１　遺構 …… 25
　　２　遺物 …… 30
付　編　縄文時代の落とし穴について …… 31
第４章　まとめ …… （高橋　桂） 35

挿図目次

図１　針湖池遺跡の位置
図２　周辺遺跡分布図
図３　周辺地形図及び調査区
図４　多目的広場設計図
図５　調査区遺構全体図
図６　ＴＰ列１配置図
図７　ＴＰ列２配置図
図８　ＴＰ列３配置図・周辺土坑配置図
図９　溝状土坑実測図（１）
図10　溝状土坑実測図（２）
図11　溝状土坑実測図（３）
図12　溝状土坑実測図（４）
図13　溝状土坑実測図（５）
図14　方形土坑実測図（１）
図15　方形土坑実測図（２）
図16　方形土坑実測図（３）
図17　縄文土器拓影図
図18　周溝墓全体図
図19　１号方形周溝墓（SD１）実測図
図20　１号円形周溝墓（SD２）実測図
図21　２・３号円形周溝墓（SD３・４）実測図
図22　弥生時代の遺物
図23　飯山地方縄文時代落とし穴出土遺跡
図24　鳴沢頭Ｉ遺跡落とし穴配置図
図25　小泉遺跡落とし穴配置図

表 目 次

表１　TP列１計測表
表２　TP列２計測表
表３　TP列３計測表
表４　SK計測表
表５　飯山地方縄文時代落とし穴遺構一覧

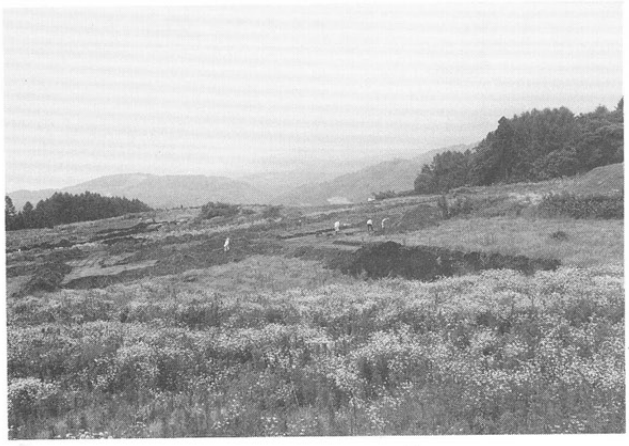
写真図版目次

写真１　針湖池遺跡近景
写真２　発掘調査（弥生時代周溝墓）
写真３　発掘調査（縄文時代溝状土坑）
写真４　現地見学会（1998年７月10日開催）
写真５　溝状土坑の調査
写真６　溝状土坑配列状況（TP列２）
写真７　１号土坑（SK１）
写真８　４号土坑（SK４）
写真９　７号土坑（SK７）
写真10　９号土坑（SK９）
写真11　溝状土坑列２（TP列２）空撮
写真12　周溝墓群の調査（SD１･SD２）
写真13　円形周溝墓（SD２・３）
写真14　１号方形周溝墓（SD１）
写真15　SD１第3溝内土器出土状況
写真16　SD１第3溝内土器出土状況
写真17　１号円形周溝墓（SD２）
写真18　調査風景
写真19　SD２第３溝内土器出土状況
写真20　出土遺物

序章　針湖池遺跡発掘調査の概要

1　発掘調査のあらまし

飯山市が計画した長峰運動公園内多目的運動広場建設に伴って、平成10年６月から７月にかけて発掘調査を実施した。この調査は、緊急発掘調査と呼ばれ、記録保存を目的とした調査である。調査が終了した段階で工事が開始され、発見された遺跡はすでに消滅している。



針湖池遺跡の調査

2　発掘調査の成果

縄文時代の落とし穴　約3500年前と推定される縄文時代後期の狩猟用の落し穴が合計49基発見された。落し穴は、長さ２ｍ～４ｍ、幅30～50㎝の細長い溝状のものと、長径１ｍ前後の長方形形ないしは楕円形の落し穴とがある。溝状の落し穴はいくつかがまとまって列をなしており、今回の調査では三列確認している。北海道や東北地方で発見される事が多く、エゾシカを捕獲するための罠猟であったとする意見がある。本遺跡でも、針湖池（当時は湿原か）に集まるニホンジカの狩猟を目的として造られたと推定する事もできる。

また長方形を呈する落し穴は、底面に小さな穴が掘られており、関東・中部地方で多く発見されている逆茂木のための小穴と推定される。溝状の落とし穴ほど明確にできなかったが、この落し穴も獣道などに規則的に造られているようである。

針湖池周辺は、縄文時代には良好な狩猟場であったと推定される。

縄文時代の落とし穴

弥生時代の墓地　時代はやや新しくなり、約1700年前の弥生時代後期に特徴的な墓が造られた。方形および円形に溝を掘りその内側に埋葬する施設を造ったもので周溝墓と呼ばれている。本遺跡では方形１、円形３、計４基の周溝墓が発見された。飯山市における弥生時代の周溝墓は、飯山須多ヶ峰遺跡に次いで二遺跡目である。周辺を調査したが家の跡などは確認されなかったので、集落とはやや離れて墓域として存在していた事になる。当時すでに特定の場所を墓地ときめ、多大な労力を用いて周溝墓を築いた事が伺える。

弥生時代円形周溝墓の調査

第１章　　遺跡とその環境

第１節　　遺跡の地理的位置

針湖池遺跡は、長野県飯山市大字旭字長峰４３６１番地ほかに所在する。付近は旧町村の常盤・外様・柳原の各村及び飯山町の境にあり、現在は大字常盤・寿・旭・飯山となっている。したがって、厳密には針湖池遺跡はこれら４つの大字にまたがって所在していることとなる。

飯山市は長野県の北端にあり、近世飯山藩の城下町として発展してきた。甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平地が飯山盆地である。飯山盆地は南北に約15km、東西の最大幅は約６kmの規模をもち、長野県内の盆地の中でも小さな盆地のひとつである。盆地底のほぼ中央を千曲川が北流し、右岸は木島の平、左岸は南北に走る長峰丘陵によって東西に二分され、東を常盤平、西側を外様平とそれぞれ古くから呼ばれている。木島の平および常盤平は千曲川の氾濫源であり、かつては水害常襲地帯でもあった。一方、外様平は西山麓の小扇状地と広井川によって形成された肥沃な低湿地が広がり、古くより穀倉地帯となっている。

長峰丘陵は、飯山市街地北の有尾から戸狩にかけて細長く分布し、南北約７km、東西の幅は最も広いところで1.2km、盆地底からの比高差は最大100mに及ぶ。丘陵東側は直線的に延び、丘陵斜面も急傾斜であるが、西側は曲線的な山麓線を示し、丘陵斜面も比較的緩い傾斜を示している。すなわち盆地の基盤が一方に傾いた傾動盆地内に見られる山麓線の特性を備えており、長峰丘陵全体が西側に傾いていることを示しているとされている（註１）。

この長峰丘陵のほぼ中央に針湖池がある。かつては針尾池と呼称されていた。湖は標高385mの火山灰の中にあり、長軸の長さ300m、最大幅160m、湖面の面積は33,600㎡である。近世より農業灌漑用水池として利用されており、東側に堰堤を築きくぼ地をせき止めて春季の融雪水によって涵養されている。したがって、当初は小さなくぼ地に渭水したものであろうと考えられる。湖底より湧水があるとの言い伝えもあるが、そのような事実は確かめられていない。

針湖池遺跡はこの湖の周辺に位置し、特に湖岸東の丘陵地に縄文時代表裏縄文土器・押型文土器をはじめ前期土器や弥生時代、平安時代の土器が採集されている。なお、表裏縄文土器や押型文土器を多く採集された丘陵地は所有者によって土取りがなされ、一部消滅してしまったことは誠に残念である。また、湖岸からも縄文時代の土器や旧石器時代の石器も発見されている。

今回の調査地区は湖岸の西側の丘陵地で、従来より遺物の採集もなかったため遺跡の範囲とは周知されていなかった場所である。地形的には針湖池に向かって緩く傾斜するが、仔細に観察すると尾根状地と谷状地とが交互に展開する複雑な地形を呈している。作物として、グリーンアスパラ・長芋・花卉などが作られていた。

なお、本遺跡は「針尾池」遺跡として登録してあったが、いつの間にか国土地理院発行の地形図でも針湖池に変更されていたため、混乱を防ぐために平成９年度に針湖池遺跡に名称変更を行っている。

（註１）　飯山市　1991　飯山市誌　自然環境編

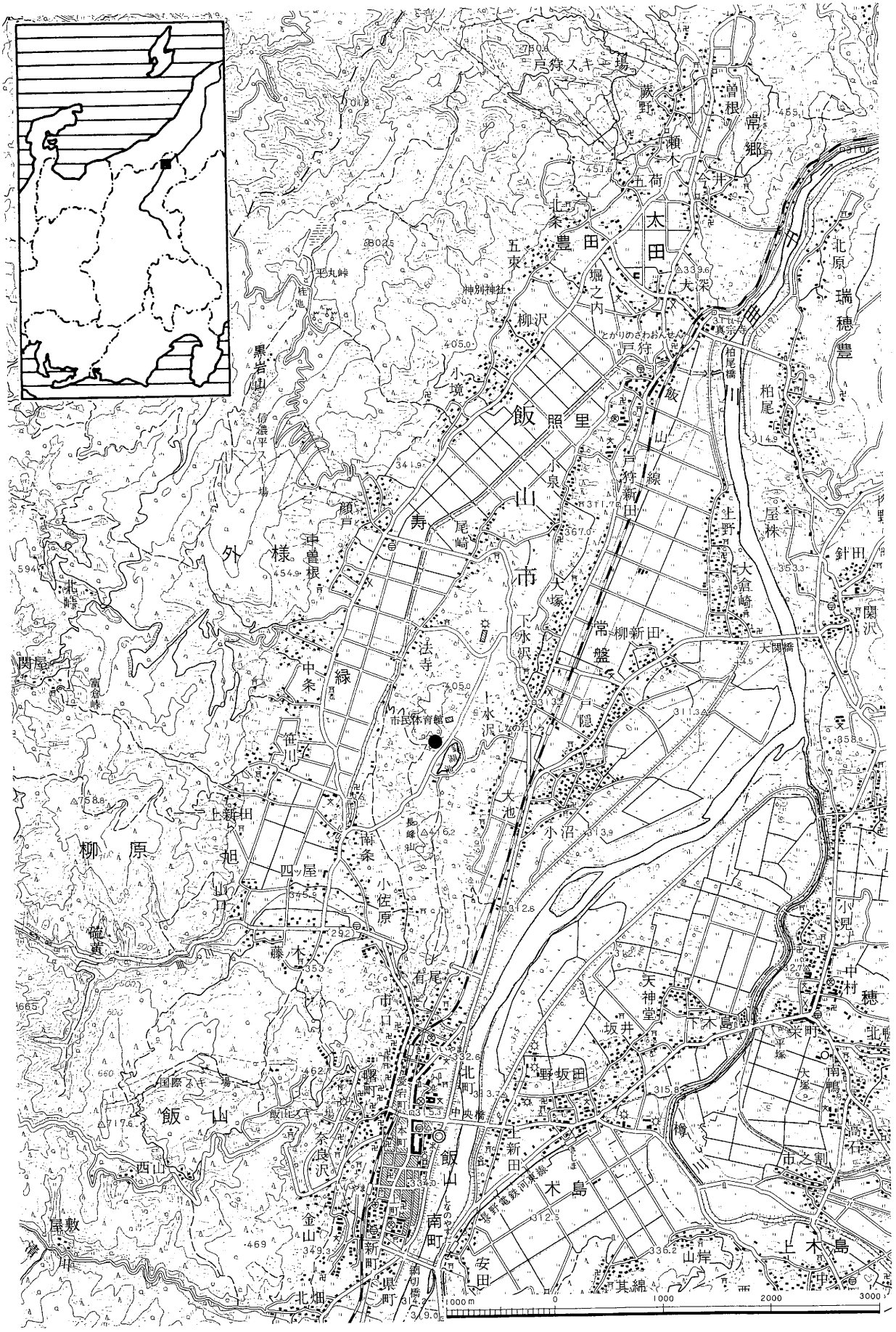


図１　針湖池遺跡の位置（1：50,000）

第2節　周辺遺跡

針湖池遺跡以北には多くの遺跡が密集し、特に弥生時代中期～後期にかけての遺跡群が多い事で知られている。本稿では、長峰丘陵を中心とした周辺遺跡について時代別に概説していく。

旧石器時代　飯山市域では千曲川河岸の段丘面に密集しているが、長峰丘陵上でもいくつか知られている。大塚遺跡（2）は昭和44年に当時の飯山北高等学校の学生によって発見された。ナイフ形石器・彫器を組成する一群と細石器の一群が存在している。小泉遺跡（4）は弥生時代の遺跡として著名であるが、ナイフ形石器や石刃石核・剥片なども発掘されている。（仮称）尾崎遺跡（8）や長峰遺跡（21）、有尾遺跡（29）でも発見されているが、まだ石器群の内容は明確でない。長峰丘陵上の旧石器時代遺跡は今後とも新たに発見される可能性が高い。

縄文時代　草創期から早期にかけての表裏縄文土器を検出した小佐原遺跡（20）がある。昭和44年に発掘調査が行われ、広瀬昭弘によって報告されている（広瀬1981ほか）。長峰丘陵南端の有尾遺跡は、前期有尾式土器の標式遺跡として著名である。須多ケ峯遺跡（28）は、中期前葉の土器片が採集できる遺跡として注目されていたが、1994年の調査で住居址1軒を検出している。また、正行寺北遺跡（16）は近年になって発見された遺跡であるが、前期諸磯様式期の土器片が採集されている。なお、小泉遺跡と須多ケ峯および有尾遺跡では縄文時代と推定される落とし穴群が検出され、特に小泉遺跡Ⅶ地区で153基の溝状の落とし穴遺構が検出されている（飯山市教委1995A）。

弥生時代　長峰丘陵を中心とした地域は、本時代の遺跡群として特徴づけられる。特に西長峰（10）遺跡以北の遺跡の大半は弥生時代から古墳時代初期にかけての遺跡である。このうち発掘調査を実施した遺跡は東長峰遺跡（9）、小泉遺跡、柳町遺跡（6）、両面寺遺跡（5）、須多ケ峯遺跡である。東長峰遺跡は昭和25年に調査が実施され、10軒の後期住居址が発見されている。小泉遺跡は長峰工業団地造成に伴う調査で、31,500㎡の面積を発掘調査し、中期・後期住居址51軒、掘立柱建物址153棟、木棺墓153基を検出した。柳町遺跡は、古くは桐原健氏等によって調査されているが、その後の調査でも中期・後期住居址を検出している（飯山市教委　1995B·1996）。須多ケ峯遺跡は昭和40年に県下で最初の方形周溝墓が2基発見されている。

古墳時代　　集落遺跡　弥生時代の項で触れた柳町遺跡、小泉遺跡・須多ケ峰遺跡および有尾遺跡で集落址が確認されている。柳町遺跡では、1994年及び1995年の調査で住居址・溝址・方形周溝墓が出土している。須多ケ峰遺跡では、竪穴住居址4軒、掘立柱建物址2棟が発見されている。また、有尾遺跡では、竪穴住居址1軒、溝址が発見されている（飯山市教委　1992）。これらのうち有尾遺跡は和泉期から鬼高期の時期で、他は古墳時代初頭の土器群である。

古墳　長峰丘陵南端の丘頂部に有尾古墳群（27）があり、1号古墳が前方後方墳で他は円墳である。大塚古墳（1）は径30mの円墳で、市内では最も大きな円墳として知られている。この他、茶臼山古墳群、大池古墳群などが知られているが、発掘調査が実施された古墳はなく詳細についてははっきりしていない。

奈良・平安時代　奈良時代に比定される遺跡は、現在までのところ市内では確認されていない。続く平安時代の9世紀中半以降、いくつかの遺跡が現れてくる。柳原の北原遺跡（17）は9世紀後半の遺跡で、約30箇所の鍛冶遺構と2軒の竪穴住居址および井戸址・甕棺墓などが発見されている。柳町遺跡でも平安時代の住居址が発見されている。鬼ケ峰遺跡は調査された経緯はないが、平安時代の土器片が採集されている。

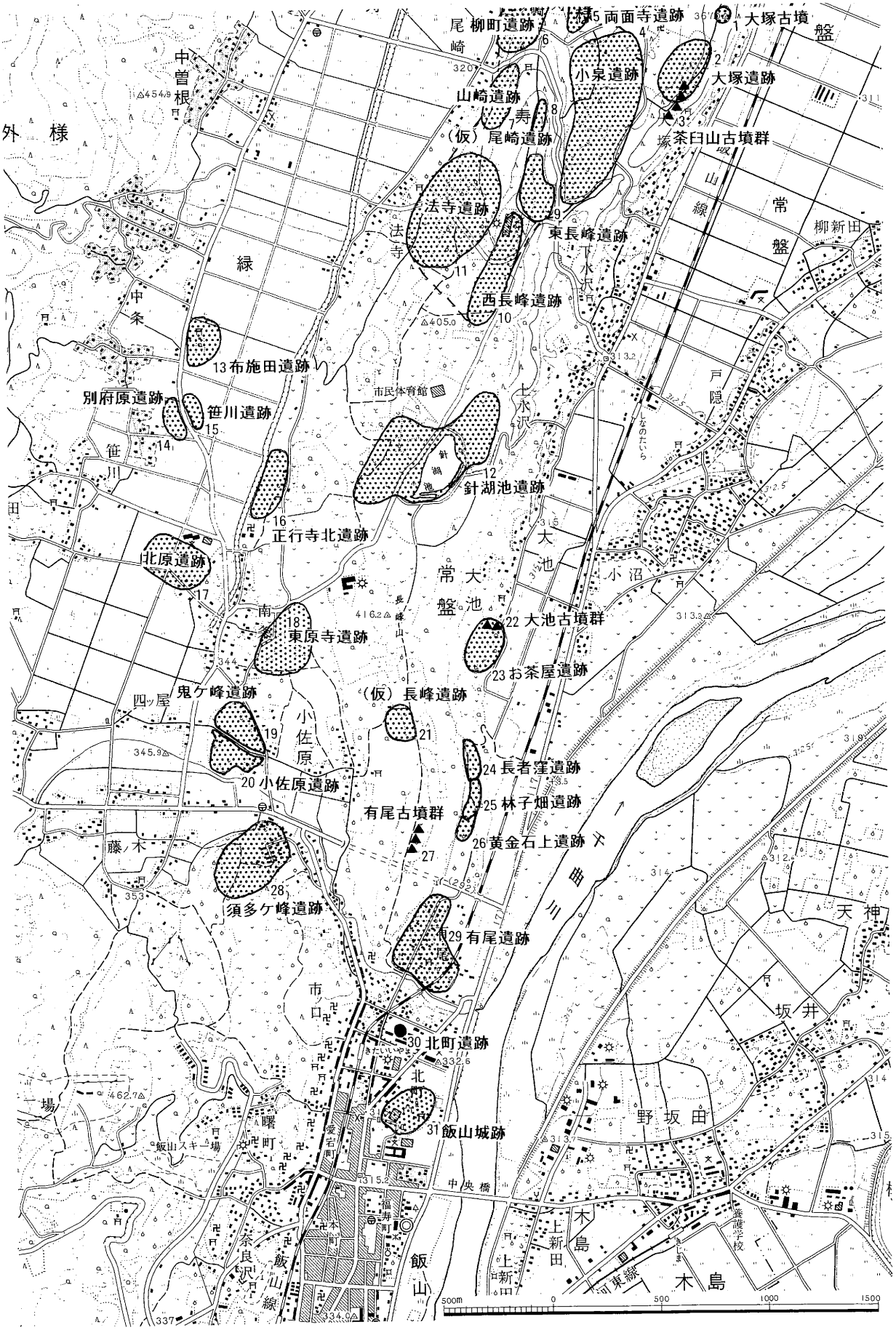


図２　周辺遺跡分布図（1：25,000）

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

飯山市は針湖池周辺を長峰運動公園として、これまで市民体育館、市民プール、市営球場、テニスコートなどの諸施設を建設し、さらに桜やケヤキなどの植樹を行って環境整備をはかっている。そして、今回2001年の冬季国体に向けて多目的グラウンドの造成や施設建設が計画されることとなった。平成９年度は先行する形でインフォメーションセンターの建設が計画され、その部分については確認調査が行われたが遺構は確認されなかった（飯山市教育委員会　1998)。そして、用地買収の済んだ平成10年度、総面積約65,000㎡を対象として多目的広場造成に伴う確認調査が行われることとなった。工事対象地区は針湖池の西側丘陵一帯で、これまで遺跡の範囲内であることは周知されていなかった。そのため、まず確認調査を行いその結果により再度協議を行い、必要によってはそのまま発掘調査に移行することとして取りかかることとなった。

調査は飯山市（建設部都市計画課担当）より依頼を受けた飯山市教育委員会が調査団（団長　高橋桂飯山市文化財保護審議会会長）を編成して行うこととした。

第２節　調査経過

調査対象地は、農作物作付けの関係もあって６月より調査着手可能となった。既に触れたように、対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地「針湖池遺跡」に近接しているものの範囲内であるとは明確でなかった。そのため、限られた時間でもあったため広大な工事対象地区をできるだけ効率的に調査し、遺跡の有無を確認することに主眼をおいた。

確認調査三日目で早くも遺跡の存在が確認されたため、担当課と協議を行い、工事日程に重大な支障がでない範囲でできるだけ広範囲に記録保存を図ることで合意された。以下に調査日誌抄録を掲載する。

平成10年

６月８日（月）　調査対象地の境界を都市計画課渡辺技師と確認。器材運搬並びにテントを設営する。インフォメーションセンター西側の畑地は作物の関係で調査不可能となる。

９日（火）　バックホーによる表土除去。併行してジョレンにより精査。遺物・遺構は認められない～10日。

11日（木）　バックホーによる表土除去続行。調査区南側において溝状土坑確認（TP列１）。さらに拡張する。ほぼ東西に並ぶことを確認する。調査区北側において弥生土器と周溝墓を検出する。

12日（金）　周溝墓検出地区において計４基を確認する。バックホーによる表土除去続行。TP１列ほぼ完掘する。

15日（月）　周溝墓検出地区の写真撮影。午後より掘り始める。

16日（火）　周溝墓（SD１～４）調査続行。方形周溝墓（SD１）北側の土坑を調査。午後市教委平野生涯学習課長と都市計画課森係長ほかで協議。遺構が多く検出されたので本発掘を行う事とし、期間は７月初旬までとし、費用についてはその後の協議の中で確認調査分および報告書刊行作業のすべてを合わせ総額2,690,000円とした。

図３　周辺地形図及び調査区（1：5,000）

17日（水）　SD１ほぼ完掘、SD２の円形周溝墓に着手。
18日（木）　周溝墓地区調査続行。樋口昇一・桐原健両氏視察。
19日（金）　周溝墓地区調査続行。セクション等実測。業者、工事用メッシュに合わせた基準杭10点設置。
23日（火）　周溝墓地区調査。SD１清掃・写真撮影。SD２セクション完了、写真撮影実施。
24日（水）　バックホーにより調査地区拡張～25日まで。TP列２調査に入る。
26日（金）　周溝墓地区全体写真完了。TP列２調査続行。
29日（月）　周溝墓地区メッシュをはり全体図実測着手。TP列２下段まで精査、二つに分かれるようである。
30日（火）　周溝墓地区全体図作成、レベル完了。
７月２日（木）　インフォメーションセンター西の畑（高台地区）着手できることとなり、バックホーにより表土除去。土坑を確認。
３日（金）　高台地区精査。TP列1実測。
６日（月）　TP列２ほぼ調査完了。TP列１実測、断面図完了。高台地区調査続行。
７日（火）　高台地区遺構掘り下げ。TP列２実測着手。
８日（水）　高台地区掘り下げ続行。 TP列２実測完了。
９日（木）　TP列２の下段にて新たに土坑確認、調査。午後より片づけ。
10日（金）　午後３時より現地見学会（常盤・柳原・外様各公民館共催）。40名参加。
13日（月）　ラジコンヘリによる空撮。測量作業継続。
14日（火）　飯山市早朝部課長会議において現地視察。
15日（水）　実測作業の残務整理を行いすべての調査を完了する。

第３節　調査の概要

調査対象地は約65,000㎡と広大な面積であり、工事着手直前の1か月前に確認調査を行うことには無理があったが、遺跡範囲内かどうかはっきりしていなかったため、遺跡地ではなくてほしいという淡い期待をいだきながら調査に入った。

工事の概要は約200×120mの広場と、それに付随する駐車場や管理道路を造成することであった。広場の標高は392mにあわせることから、基本的にそれ以上の高台は削土され、低い部分は盛り土されることとなる。ただし、前述した駐車場や管理道路は削土される部分が大きい。したがって、広場造成地並びに駐車場によって削土される部分を主眼として調査することとした。

調査地区は針湖池西側の丘陵地で、小高い二つの丘頂部と緩やかな斜面から針湖池につながるやや急な斜面となっている。仔細に観察すると、斜面には尾根状地と谷状地とが交互に展開されており、尾根状地にはほとんど黒色土が堆積ぜずに、逆に谷状地では２m以上の黒色土が堆積している。

発掘調査は、対象面積が広大であることから、グリットを設定ぜずに任意に選定しながら重機で表土除去を行い確認することとした。しかし、遺構が確認されたことから測量するために基準杭が必要となり、工事用図面に作成されていた20mメッシュ図をそのまま発掘グリットとして使用する事とし、業者に10点の基準杭設置を委託した。

発掘調査期間は約１か月で、調査面積約9,700㎡となった。

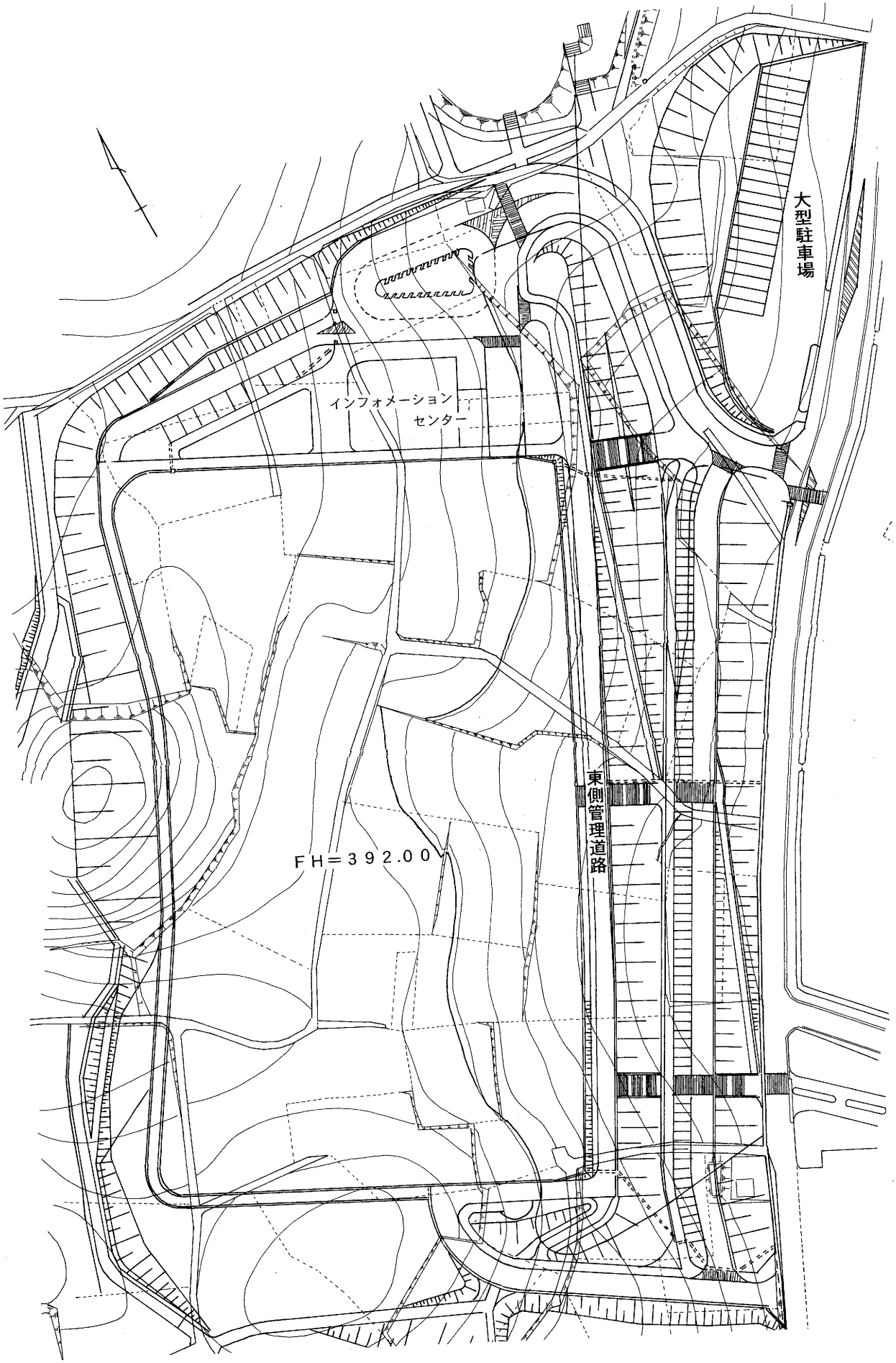


図4　多目的広場設計図（1：1,500）（調査団トレース）

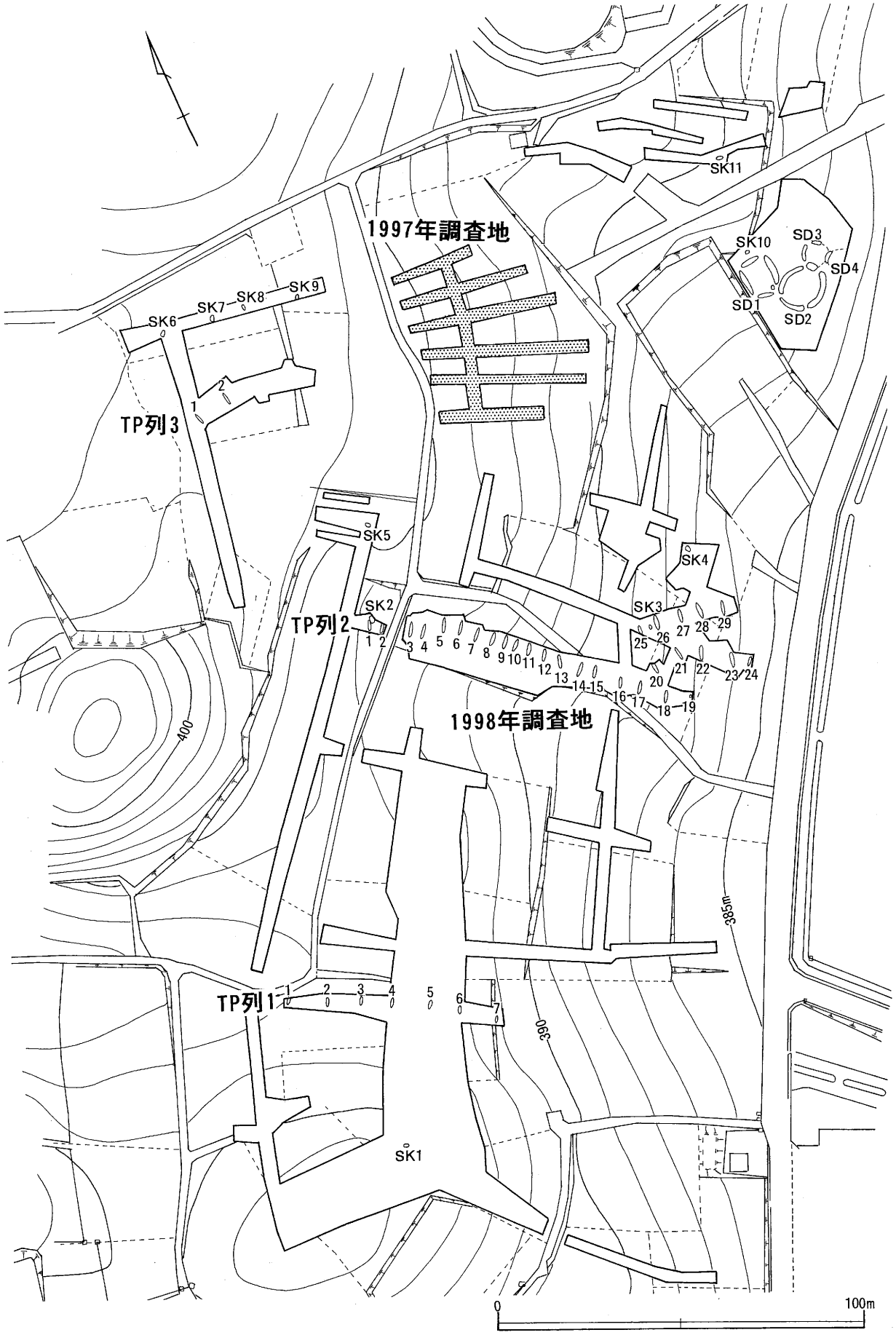


図5　調査区遺構全体図（1：1,500）

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　縄文時代

１　遺構

縄文時代の遺構は、落とし穴と考えられる土坑で、総数49基発見されている。土坑は溝状の細長い土坑（特にＴピットと略称する）38基と、幅広い長方形ないしは楕円形の土坑（SKと総称する）11基とがある。これらの土坑内からは遺物の出土が無く、唯一溝状土坑の一基より確認面において無文の深鉢破片を検出したにとどまっている。したがって、発見された土坑が縄文時代であるという確実な証拠はない。ここでは、これまでの飯山市内における発掘調査結果から縄文時代と報告するものであり、このことについては第4章でも若干触れることにする。

（１）溝状土坑（TP）

細長い溝状の土坑をＴＰと略称して説明していく事とする。ＴＰは単体で存在することはなく、列をつくって構築されている。そのため、調査区内で検出されたＴＰを列としてまとめ、それぞれＴＰ列１～３とする。ＴＰ列１は７基、ＴＰ列２は29基、ＴＰ列３は２基、計38基である。また、単体の土坑を指す場合にはＴＰ列１－１というように呼称する事とする。

ア　ＴＰ列１（図５・図６）

調査区の南側で検出されている。南の瘤状の丘頂部より下がった丘陵鞍部に構築されている。確認されたのは７基であるが、東側斜面は黒色土が厚く堆積しており、遺構は黒色土中に構築されている。このため谷状地となり黒色土が厚く堆積する東西への検出は困難と判断して調査を断念したが、湖に向かって延びているのではないかと思われる。西側へも同様に谷状地へ延びていることが伺えた。すなわち、遺構３ないし４を丘頂として東西に延びる列であり、一丘陵を越えていくように配置されている。検出した遺構の間隔は7.9m～10.1m、平均９ｍである。

なお、各個別の遺構規模等は下記の通りである。

TP列	長軸　cm	短軸　cm	深さ　cm	遺　構　説　明
－1	224	24	114	やや西側傾斜地　半割調査
－2	219	39	110	短軸やや内湾
－3	224	32	100	半割調査
－4	232	54	136	短軸上部幅広
－5	214	30	126	
－6	205	26	64	黒色土厚く、上部欠失。確認面にて縄文土器
－7	－	－	－	黒色土内　確認のみ

表１　TP列１計測表

イ　ＴＰ列２（図５・図７）

針湖池を東正面眼下に望む斜面に構築されている。検出した遺構数は29基で、下段において三列あったのが一列にまとまったような状況を呈している。25から29の列は上部が限られた範囲であるため、明確に一列に集合するか否かははっきりしないが、20から24については１から19の列に集合する事がほぼ明確である事から、本稿では三つに分岐するＴＰ列であると考え報告するものである。最下段は急速に湖に向っ

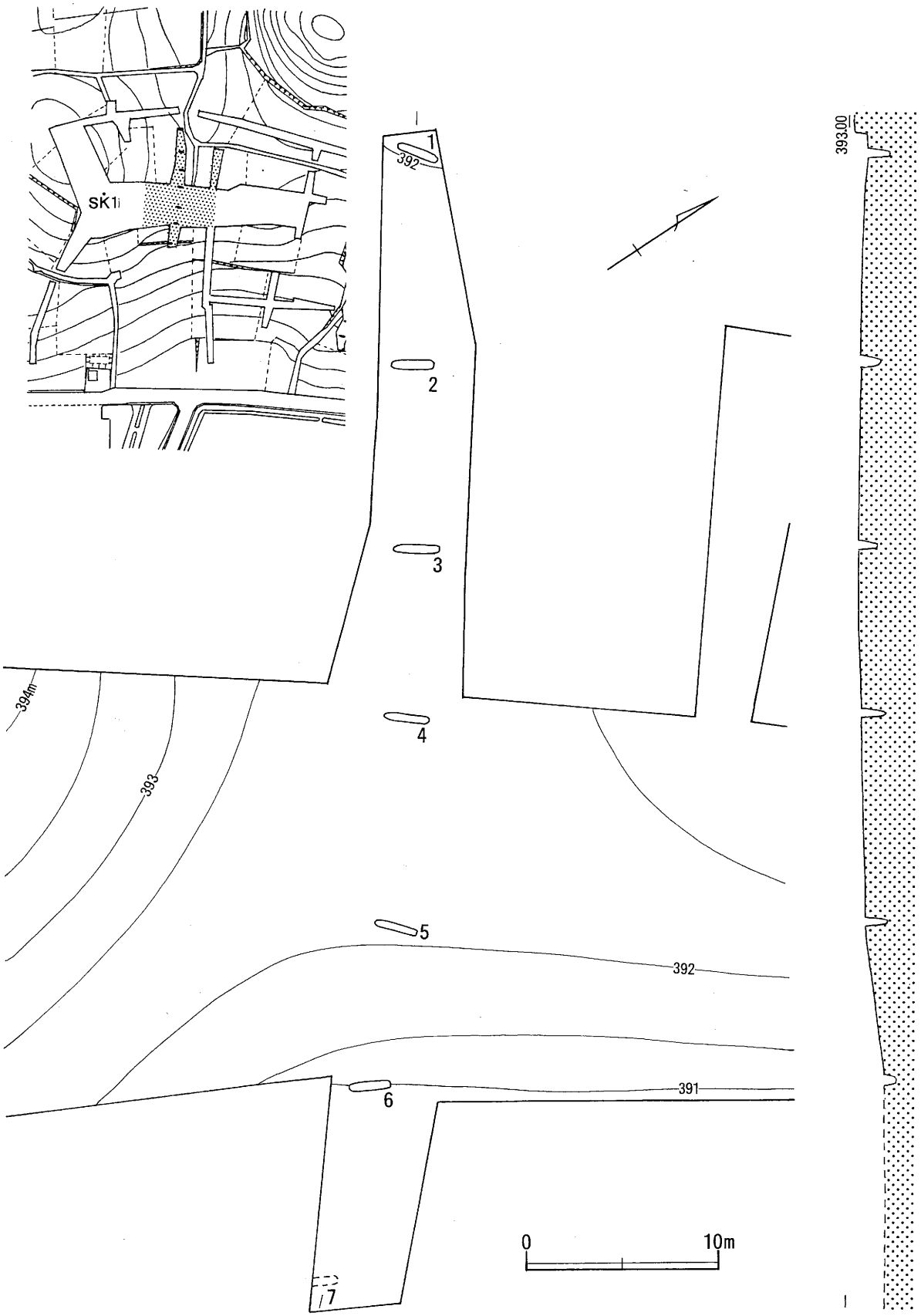


図6　TP列1配置図（1：300）

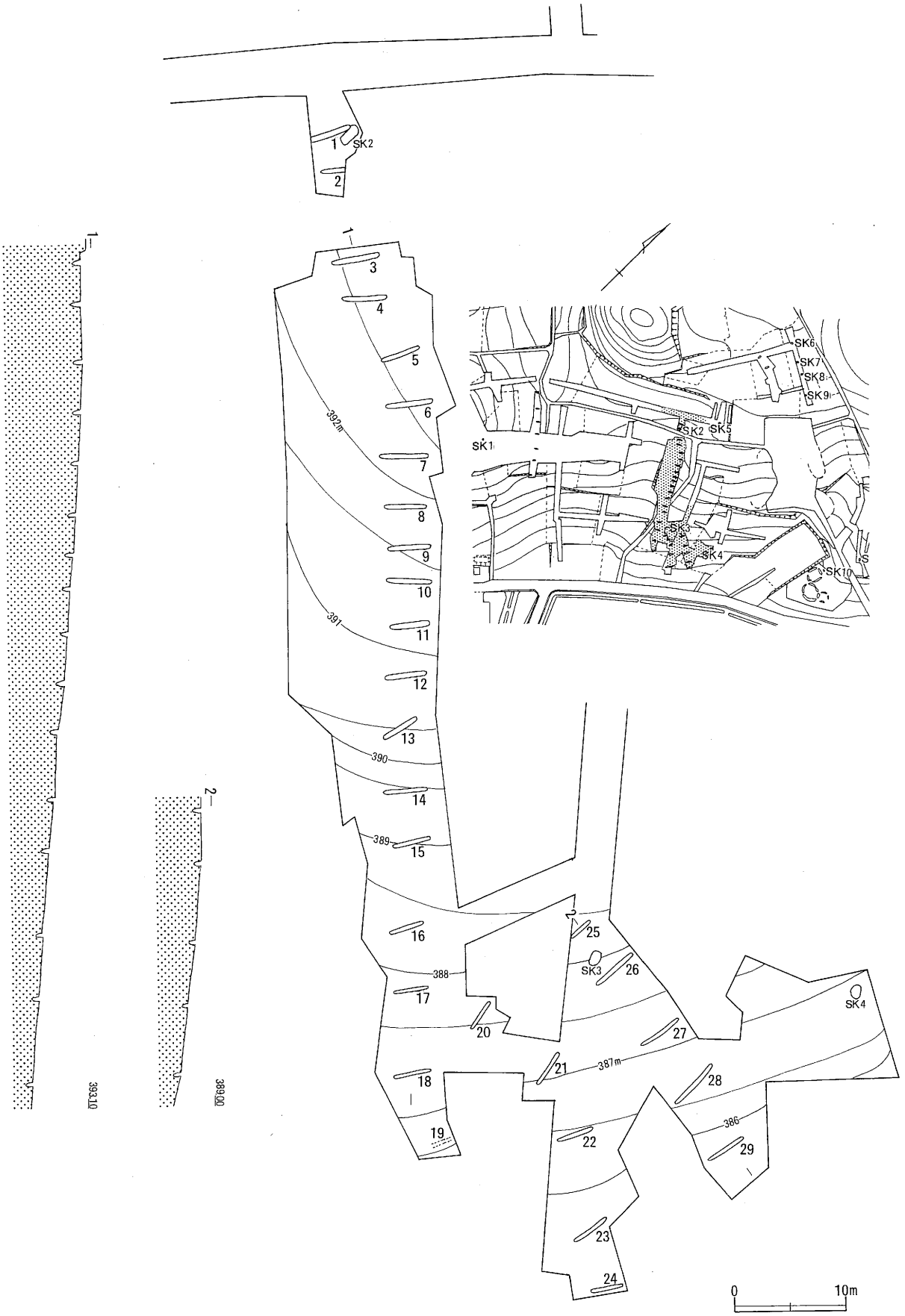


図７　TP列２配置図（1：500）

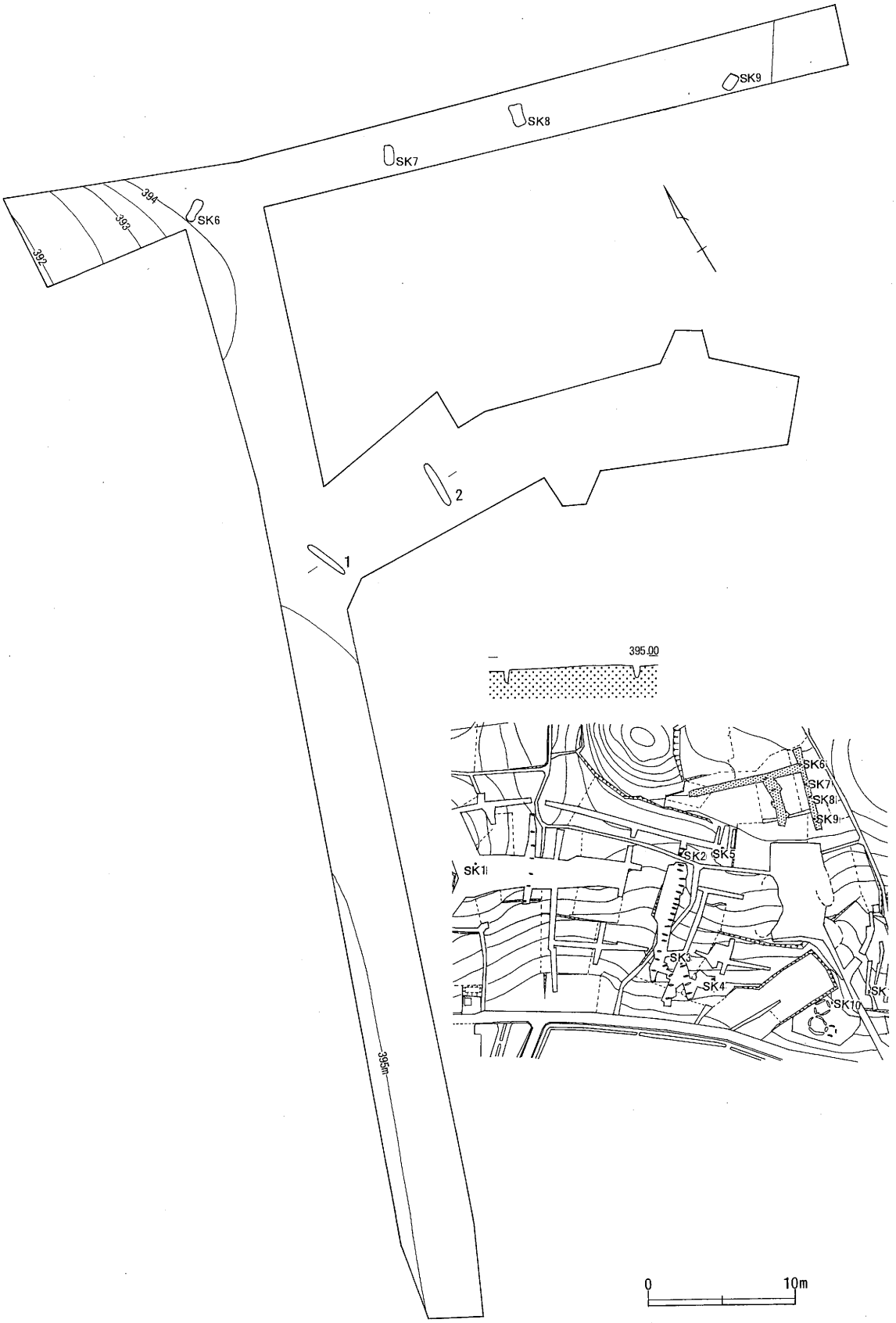


図８　TP列３配置図・周辺土坑配置図

て傾斜を増しており、黒色土も厚く堆積している。検出した列の長さは110mで、ほぼ西の丘頂に向って延びている。また南側は埋没谷であり、ＴＰ列は湖の斜面の縁に構築されている。遺構間隔は３ｍ～８ｍと一定ではない。三列が一列に集合する部分で間隔が短くなるようである。

各個別の規模等については下記の通りである。

TP列２	長軸　cm	短軸　cm	深さ　cm	遺　構　説　明
−1	−	40	(126)	長軸一部未調査
−2	−	(28)		北半分未調査
−3	(428)	38	(124)	長軸北端、トレンチャーにより破壊
−4	423	48	140	南に傾斜
−5	(392)	65	(144)	北端トレンチャーにより破壊
−6	435	74	125	短軸上面広い
−7	(438)	41	(129)	長軸両端トレンチャーにより破壊
−8	389	37	125	
−9	386	33	125	
−10	371	41	128	
−11	357	28	118	
−12	368	35	130	
−13	343	37	118	25～29と並行する
−14	391	33	102	
−15	346	27	114	坑底凹凸あり
−16	308	38	94	
−17	335	36	92	
−18	345	40	85	
−19	−	(32)	(94)	土壌撹乱のため一部のみ確認
−20	312	26	(90)	
−21	338	37	109	
−22	333	(26)	(94)	トレンチャーにより破壊
−23	369	(32)	(86)	トレンチャーにより破壊
−24	(307)	(23)	(84)	トレンチャーにより破壊
−25	303	29	101	トレンチャーにより破壊
−26	427	49	103	
−27	405	40	87	
−28	468	40	88	長軸最も長い
−29	375	33	110	

表２　TP列２計測表

ウ　ＴＰ列３（図５・図８）

調査区の西上部、平坦な地区に位置している。時間的な都合で広範囲に調査できなかったため二基のみの検出に終わっている。間隔は約８ｍである。

各遺構の規模等は以下のとおりである。

TP列3	長軸　cm	短軸　cm	深さ　cm	遺　構　説　明
−1	301	26	118	短軸細い　坑底凹凸
−2	308	33	128	

表３　TP列３計測表

（２）土坑（ＳＫ）（図５・図14～16）

長径1m前後の長方形もしくは楕円形を呈する落とし穴と考える遺構を、本稿では土坑（ＳＫ）と総称して報告する。地区内より散在的に検出されているが、SK６～９のように規則的に並んで構築されてい

るものもある。

各土坑の規模等は次のとおりである。

土坑SK	平面形	長軸　cm	短軸　cm	深さ　cm	遺　構　説　明
−1	長方形	103	63	94	調査区南丘頂　坑底岩盤あり二段
−2	長方形	161	79	83	TP列2-1に接する
−3	楕円形	139	105	134	TP列2-25･26の間に位置　下部施設1あり
−4	楕円形	134	84	106	SK3の北23mに位置　下部施設1あり
−5	長方形	108	59	133	上面一部破壊　下部施設1あり
−6	長方形	110	57	103	SK6～9並ぶ　下部施設1あり
−7	長方形	126	80	97	下部施設1あり
−8	長方形	145	76	100	下部施設1あり
−9	楕円形	108	80	97	下部施設1あり
−10	楕円形	103	49	96	SK11と並ぶか　下部施設1あり
−11	楕円形	115	70	101	下部施設1あり

表4　土坑計測表

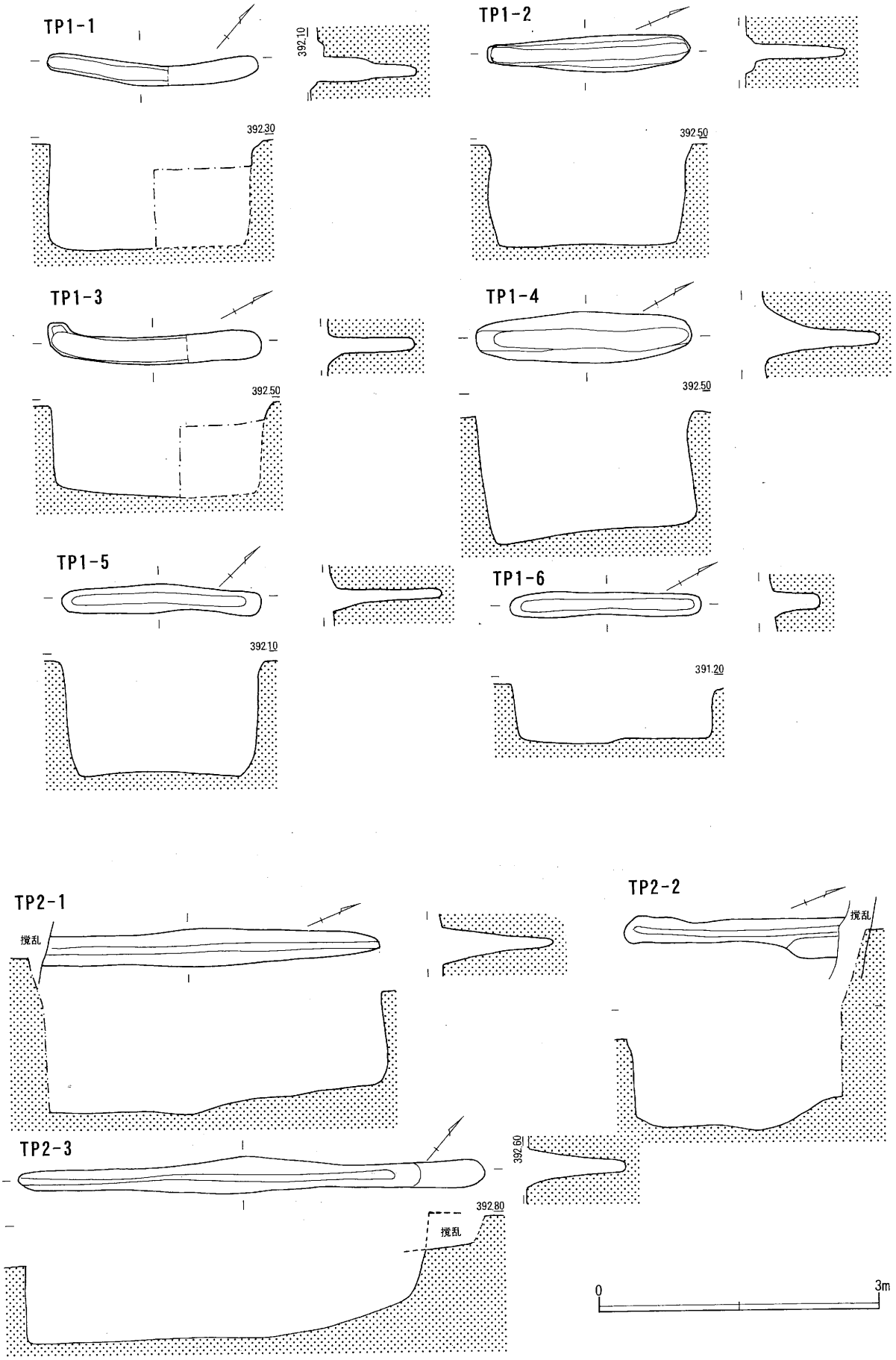


図９　溝状土坑実測図（１）（1：60）

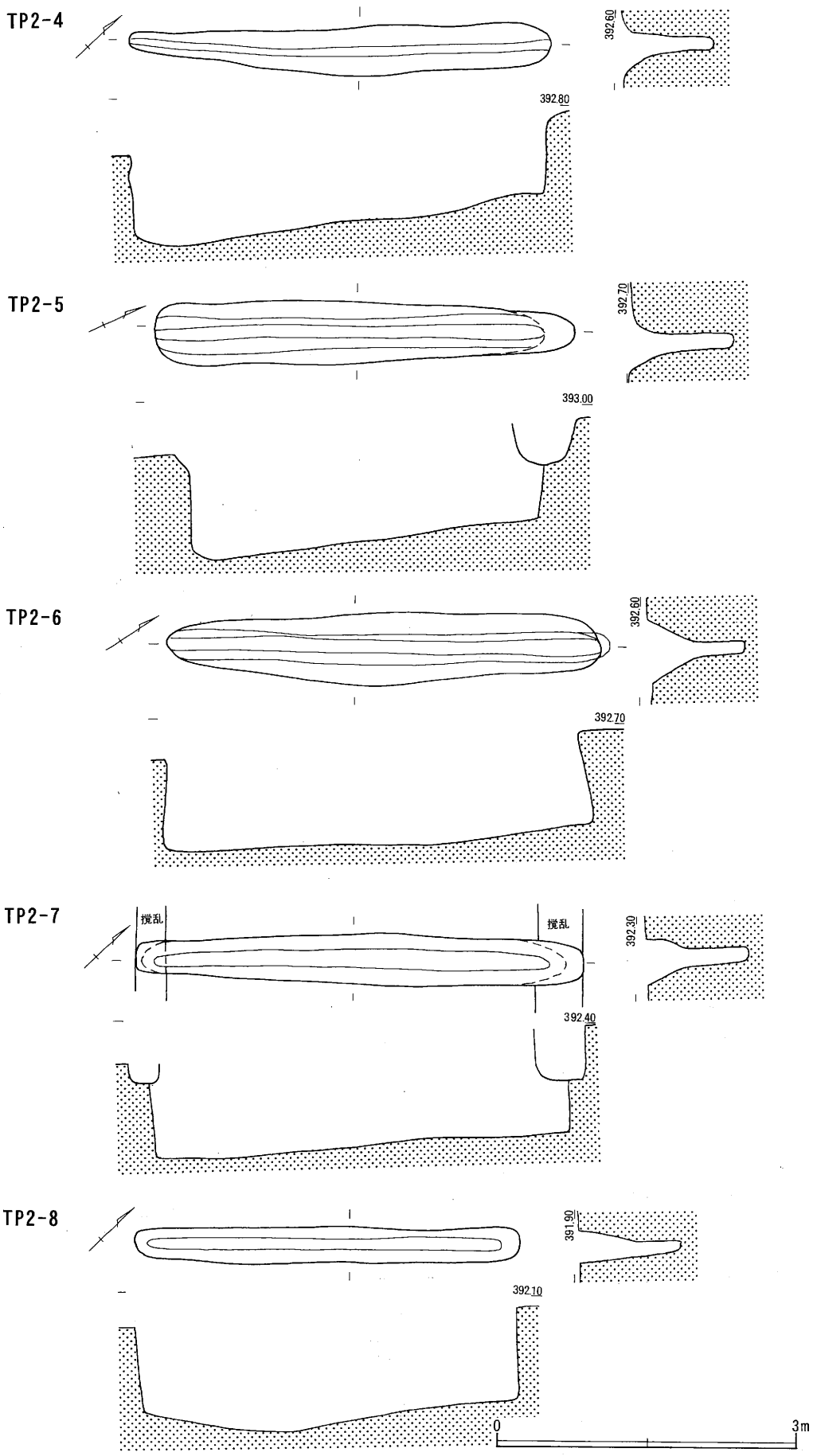


図10　溝状土坑実測図（２）（1：60）

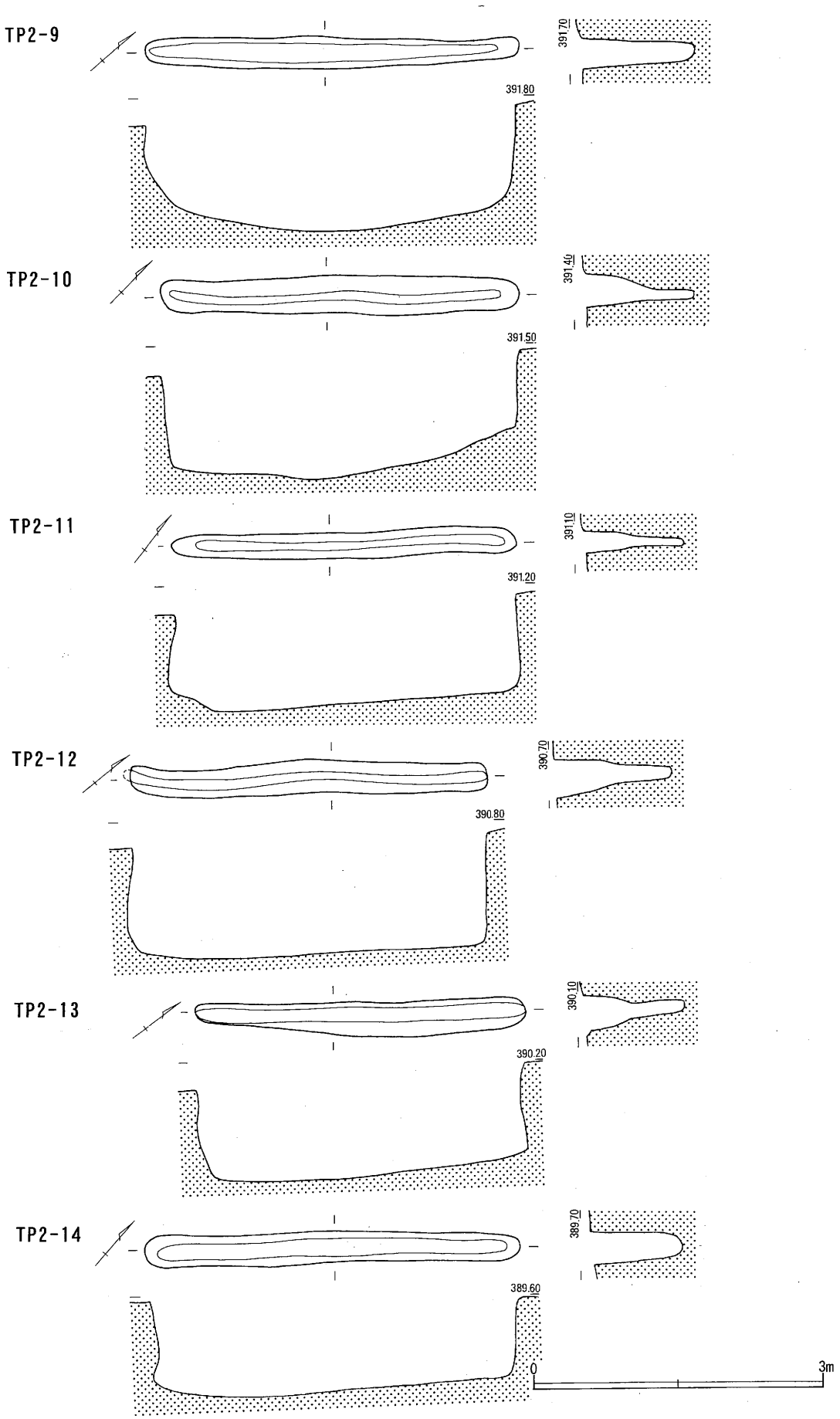


図11　溝状土坑実測図（３）（1：60）

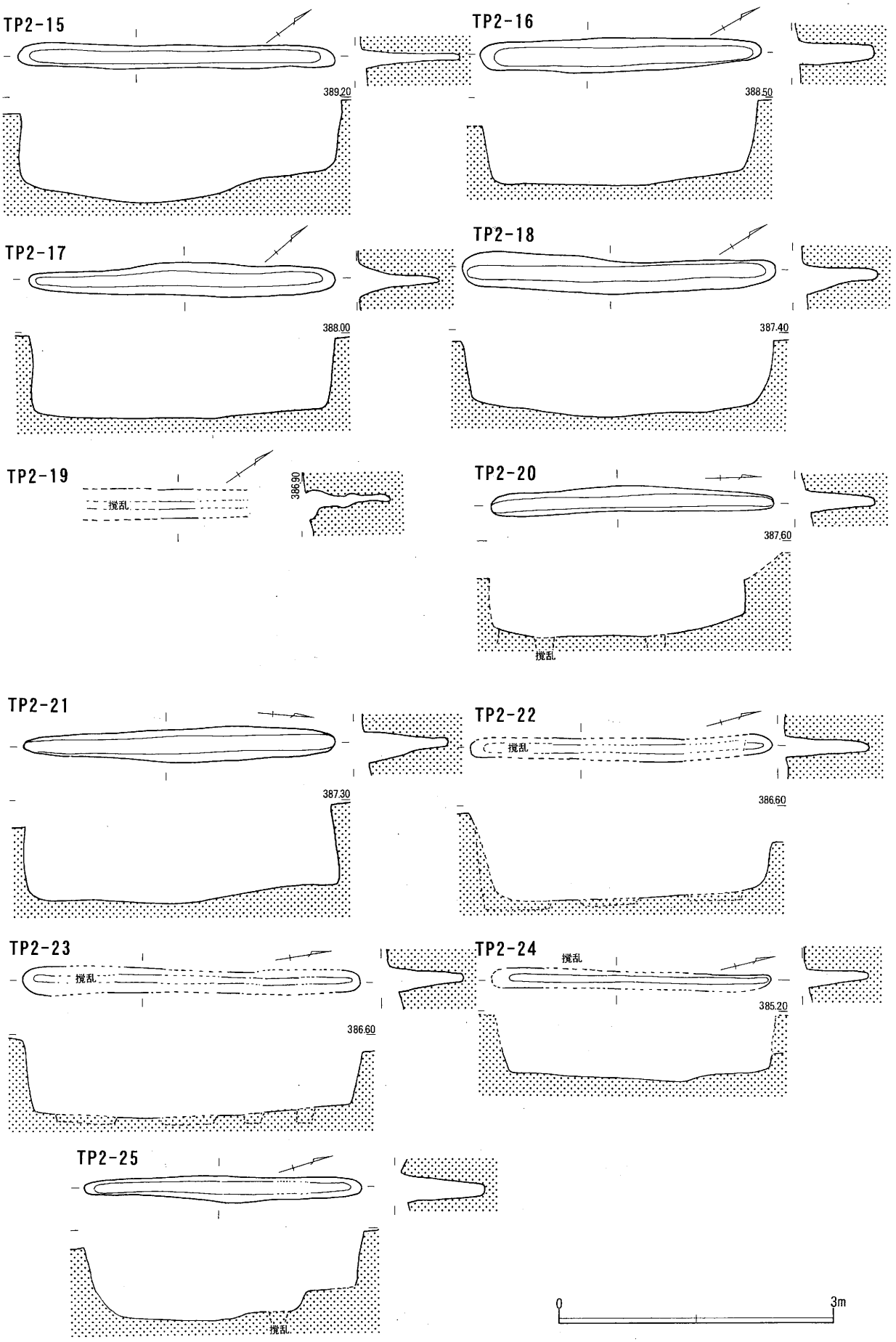


図12　溝状土坑実測図（４）（1：60）

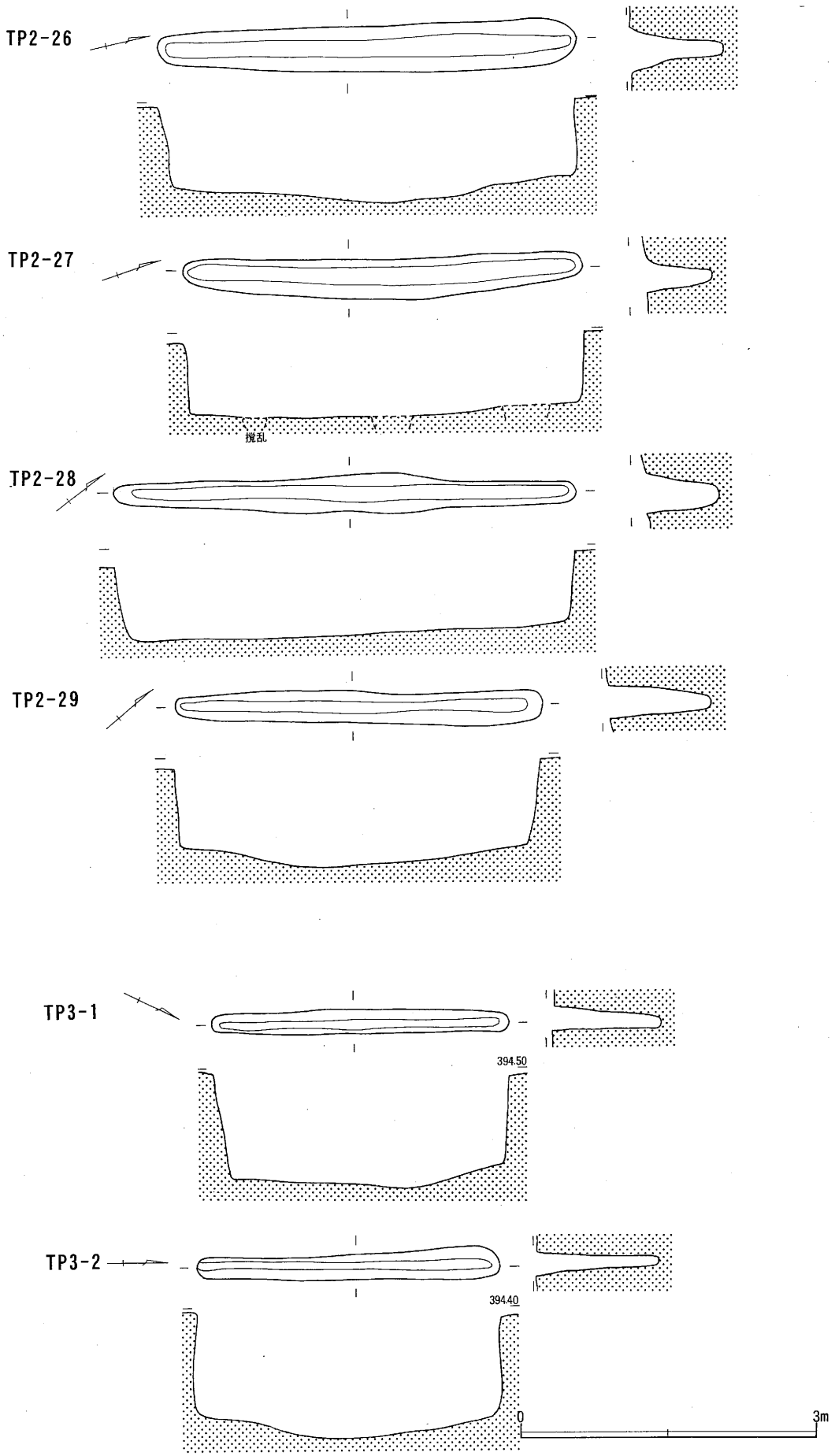


図13　溝状土坑実測図（５）（1：60）

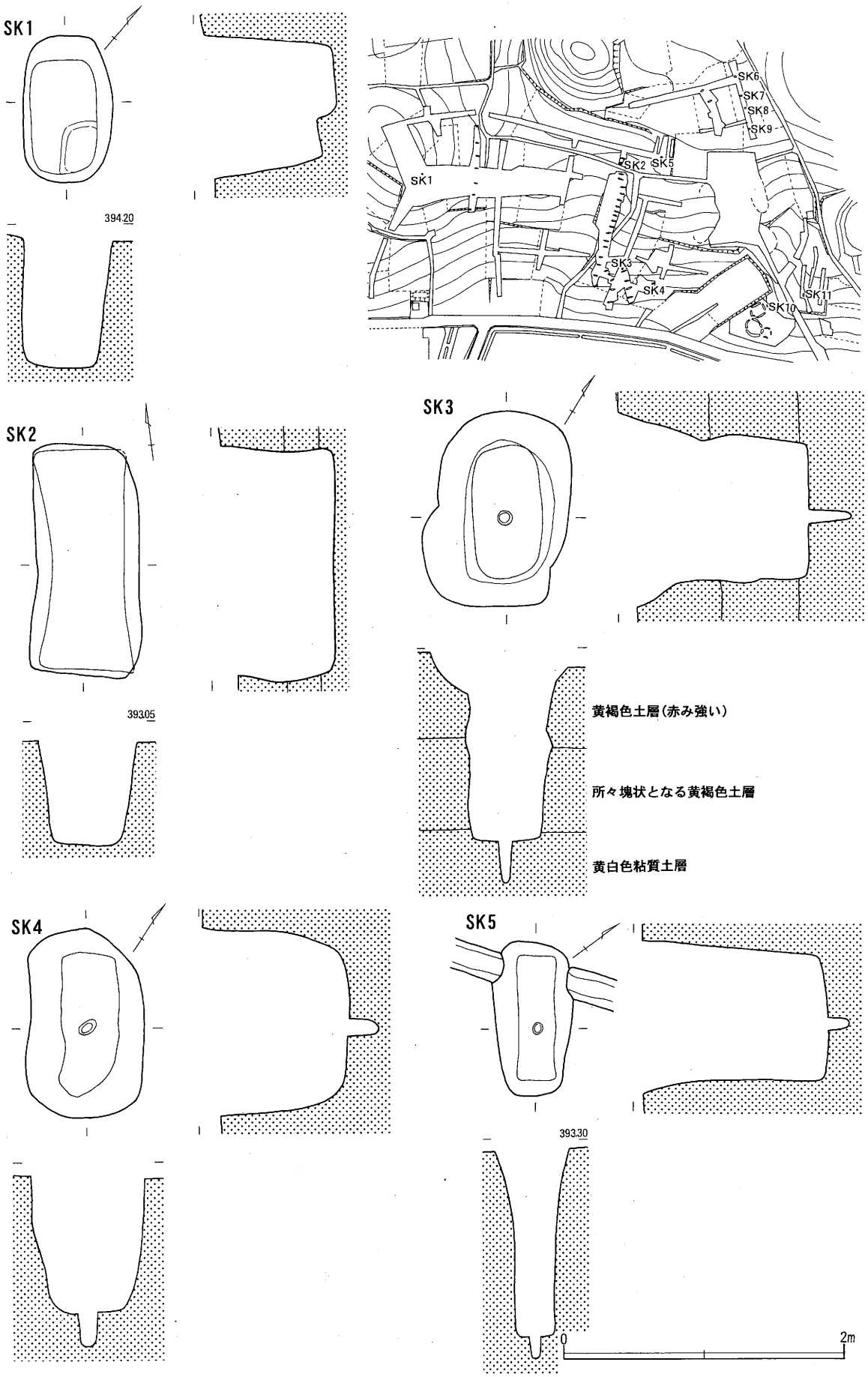


図14　方形土坑実測図（1）（1：40）

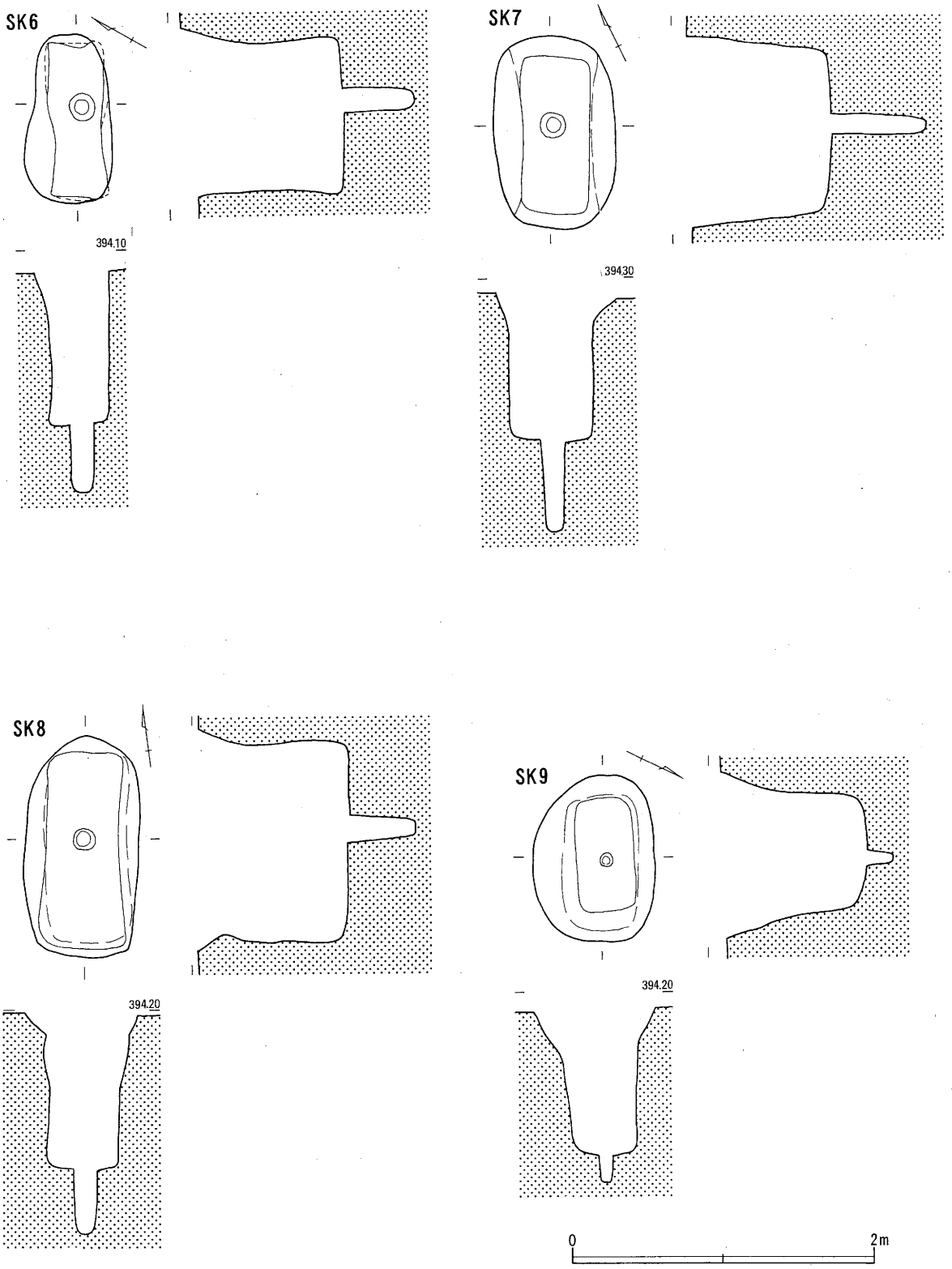


図15　方形土坑実測図（２）（1：40）

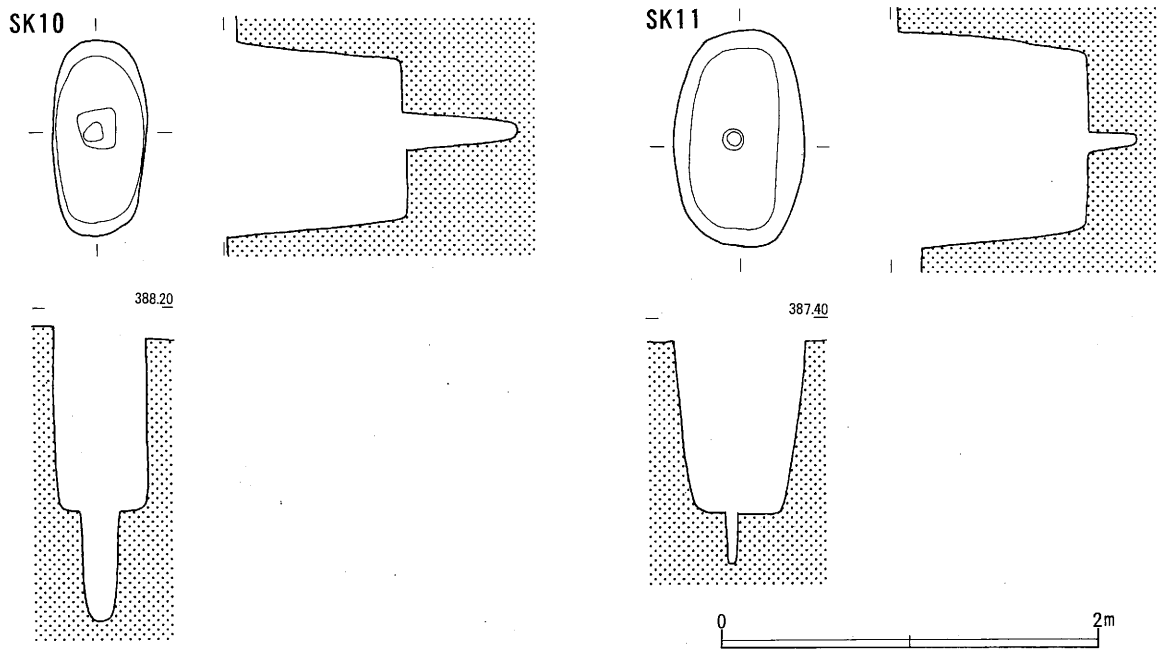


図16　方形土坑実測図（３）（1：40）

2　遺物

縄文時代の遺物は、ＴＰ列1－6検出面より出土した土器片1点のみである（図17）。

粗製深鉢形土器の口縁部破片である。色調は乳褐色で、胎土に砂・小石を含むが堅緻な焼成である。本土器片は無文であるため明確な所属時期を比定できないが、縄文時代後期の堀ノ内式から加曾利Ｂ式に伴う無文土器ではないかと思われる。

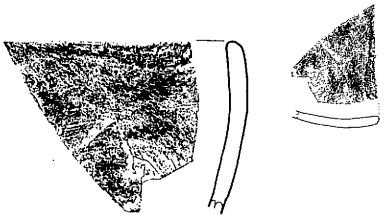


図17　縄文土器拓影　1：3

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１　遺構

弥生時代の遺構は、一地区において円形周溝墓３基と方形周溝墓１基を検出している。場所は針湖池に接した緩い傾斜地で、南側はかなり段差のある谷状地となっている。なお、東側や北側については表土が薄く、耕作機械によりテフラ層まで耕されているため有無を明確にはできなかったが、４基以上存在していた可能性は低いと考えられる。

（１）１号方形周溝墓　ＳＤ１（図19）

中軸の長さは11.30×9.40mを測り、溝の深さは最大で60cmである。四本の溝が直線で独立した形態で四隅にブリッジを残す。溝の規模は、１溝が530×110cm、３溝は460×95cm、２溝は760×130cm、３溝は705×100cmをそれぞれ測る。２溝は南端においてやや内湾気味に収束しており、３溝もそれにあわせるかのように東側に開き気味となっている。溝の掘り込みは、１溝が深さ約30cmと浅く、断面も鍋底状である。対応する３溝も同形態であるが、西端ではすり鉢状を呈している。２・４溝はすり鉢状を呈し、深さも約60cmを測る。周溝内は、深さ数cmのはっきりしないピット状遺構が２基検出されている以外、埋葬主体部と考えられる施設は検出されていない。。主軸の方位は、ほぼ磁北である。

遺物は、３溝西端の内壁際から小型の甕とそれに蓋をしたように転用の高杯が発見されている。また、２溝・３溝・４溝からは壷形土器破片や高杯形土器破片が出土している。

（２）１号円形周溝墓　ＳＤ２（図20）

１号方形周溝墓の東に接して位置する。規模は13.4×11.5mを測り、やや楕円形を呈する円形周溝墓である。溝は４か所のブリッジをもって４溝に別れており、長軸と短軸の二溝がそれぞれ対をなすように配置されている。長軸側の溝の１溝および３溝の規模は、前者が270×180cm、深さ40cmで、後者は630×120cm、深さ35cmを測る。いずれも底面は平坦で、鍋底状を呈する。短軸側の２溝・４溝は、いずれも10m前後の長さをもち、幅約１mで２溝は削平されており深さは30cmと浅い。底面は平坦である。これに対し４溝はすり鉢状を呈し、深さも65cmを測る。

遺物は、３溝の覆土上部より完形の杯形土器１点が出土したのみである。

（３）２・３号円形周溝墓　ＳＤ３・４（図21）

１号円形周溝墓の東北に接して位置する。いずれも表土が浅く、耕作機械により削平されているため溝は浅い。３号周溝墓は推定６～6.5mの規模で、１号周溝墓の１溝と共有しているものと判断される。南東の溝は検出されなかったが、これは削土により消滅したものと考えられる。したがって、１号円形周溝墓と同様に４か所のブリッジが存在したものと思われる。３号円形周溝墓は北側一部のみの検出で詳細は明らかにすることができない。主体部も検出できなかった。

２号円形周溝墓からは遺物は検出されていないが、３号円形周溝墓の溝内より高杯の破片が出土している。

図18　周溝墓全体図（1：200）

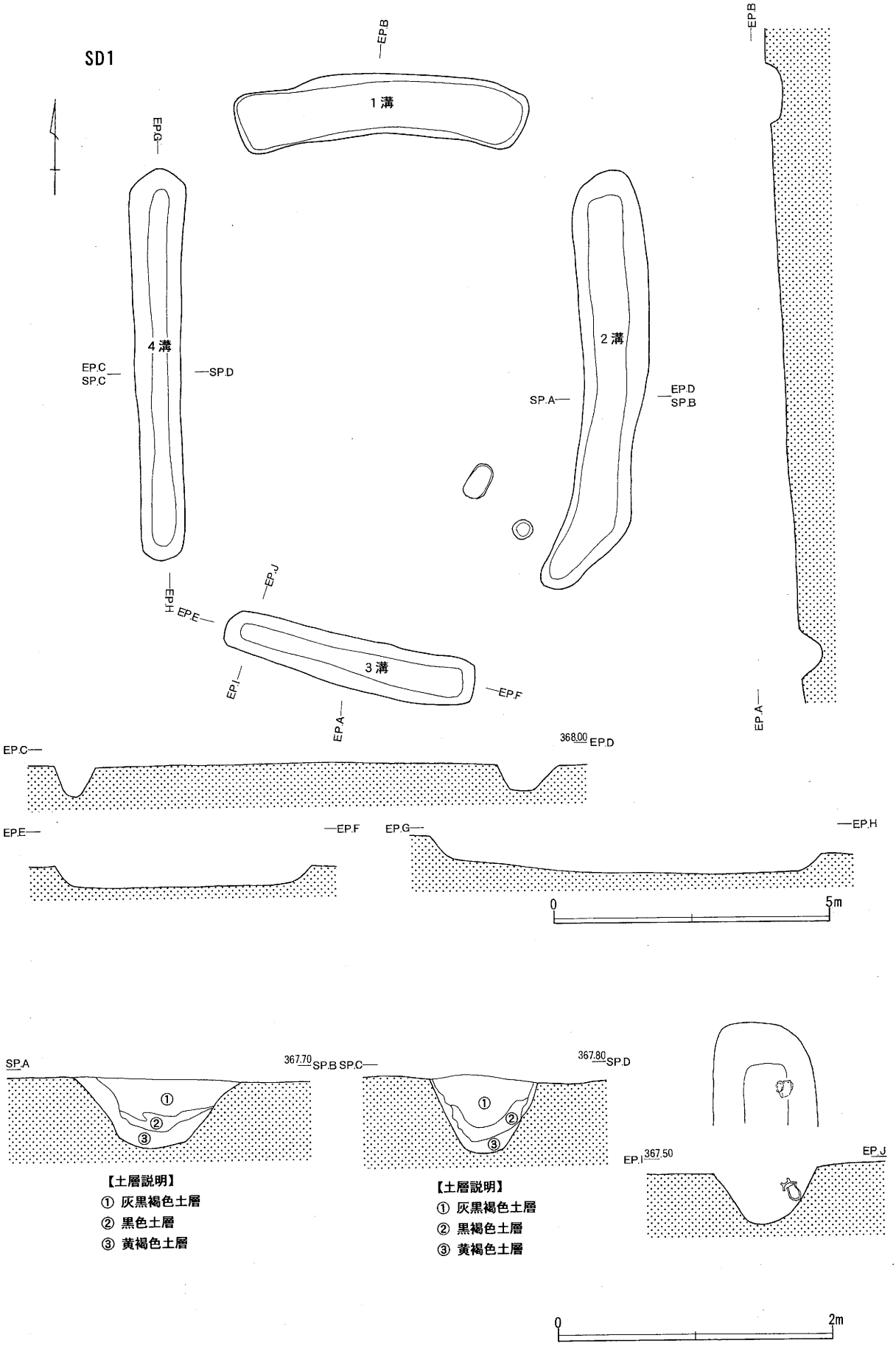


図19　1号方形周溝墓（SD２）実測図（1：100・1：40）

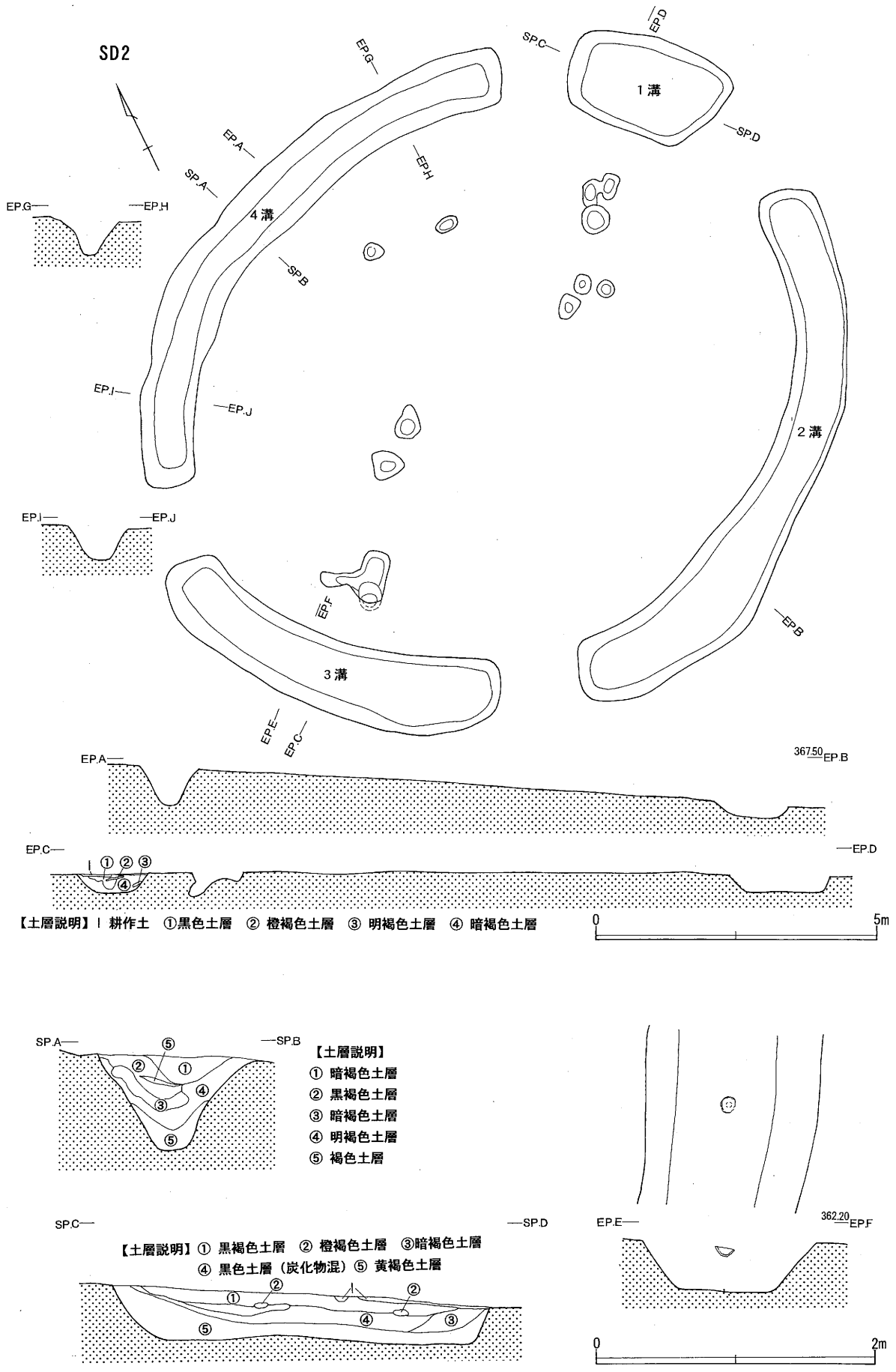


図20　1号円形周溝墓（SD２）実測図（1：100・1：40）

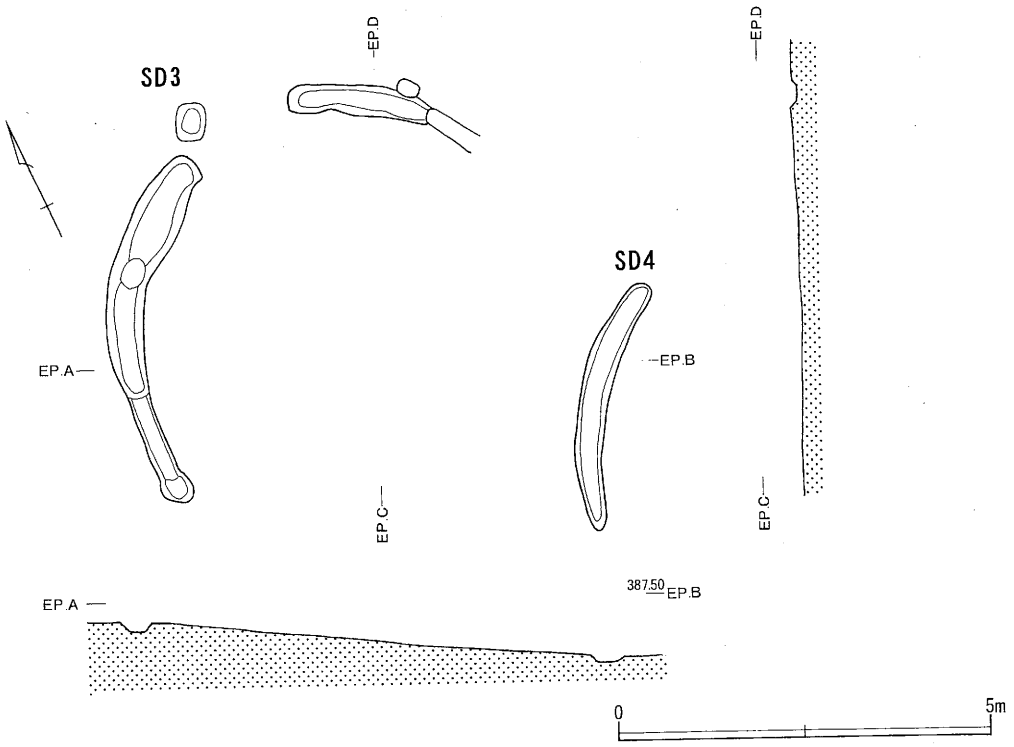


図21　2・3号円形周溝墓（SD3・4）実測図（1：100）

2　遺物

（１）１号方形周溝墓（ＳＤ１）出土遺物（図22・１～４）

甕（1）器高10.1cm、口径9.5cm、底径4.8cmの小型の甕である。頸部に簾状文をめぐらせ、胴上半部以上に櫛描波状文を施している。口縁の外反度合いはゆるく、頸部のくびれも弱い。

高杯（2）１の甕の口縁部に被せてあったもので、杯部上半と脚部下半部を欠く。外面及び杯部内面には赤色塗彩が施される。３は周溝２覆土より出土したもので、脚部下半部である。４は２溝覆土中の出土で、杯部と脚部の接合部周辺のみである。赤色塗彩される。

（２）１号円形周溝墓（ＳＤ２）出土遺物（図22・５）

杯　周溝３の覆土上部より完全な形で出土したものである。内・外面とも赤色塗彩がなされているが、内面は剥落が激しい。

このほか、３号円形周溝墓より高杯の口縁部破片が出土している。外半した口唇部に小突起をもち、赤色塗彩されたものであるが、小破片のために図示し得なかった。

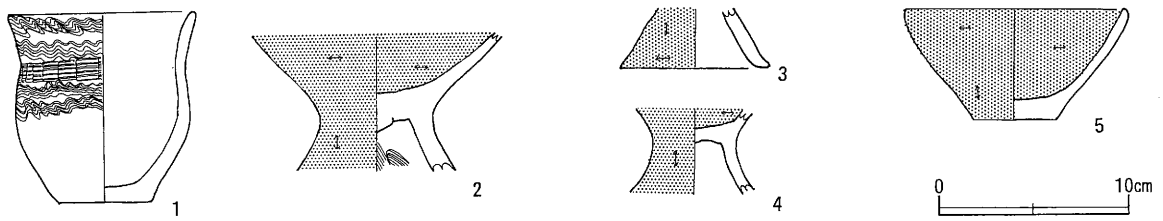


図22　弥生時代の遺物（１：４）

付編　飯山地方の縄文時代の落とし穴について

今回の調査において、縄文時代の落とし穴と推定される遺構が多く発見された。飯山市域におけるこれまでの発掘調査によって、多くの遺跡から縄文時代の狩猟に伴う落とし穴と推定される遺構が数多く発見されている。一般的には落とし穴を含めて土坑と総称され、その用途には貯蔵穴・墓坑・落とし穴などいろいろなものが含まれている。針湖池遺跡出土土坑は明確に落とし穴と証拠づけることはできないが、配列や周辺遺跡の状況から落とし穴として推定し、溝状の土坑をＴＰ、長方形もしくは楕円形の土坑をＳＫと略称した。通例では総称として土坑（ＳＫ）、落とし穴（重力ワナ）＝トラップピット＝ＴＰとしており、その意味では本遺跡出土の落とし穴をすべてＳＫあるいはＴＰに統一して報告すべきであるが、形態としてまったく異質であることから、便宜的に分けて呼称することとした。

近年、飯山市域における発掘調査において、落とし穴と推定される遺構が数多く検出されるようになった。これらは必ずしも十分な時間をかけて調査したわけではなく、遺構の構造についてのデーターは少なく、落とし穴と証拠づける根拠も明確でない。しかしながら、数次に亘る調査によって面的にとらえられる事ができ、かなり大規模に構築され、それが地形的にも構造的にも落とし穴と首肯できる成果が得られるようになってきた。本稿は、落とし穴と推定される飯山市域内の土坑の集成を行い今後の資料収集の一助になればと思い取りまとめるものである。

市内において、縄文時代の狩猟に伴う落とし穴と考えられる遺構が検出された遺跡は、針湖池遺跡を含め14遺跡を数える。以下に表で掲載する（SK方形土坑・TP溝状土坑）。

遺跡名	SK出土数	TP出土数	推定時期	地形・その他
新堤	0	1	縄文早期	高原　池を望む斜面
トトノ池南	5	2	縄文早期	丘陵地
鳴沢頭Ⅰ	0	22	縄文早期	沢（低湿地）を望む丘陵地
休場	0	2	縄文早期	沢（低湿地）を望む丘陵地
下境大原	0	22	縄文早期	沢（低湿地）を望む丘陵地
南原	3	2	縄文時代	千曲川を望む段丘斜面
屋株	0	8	縄文前期	千曲川を望む段丘斜面
照丘	1	12	縄文時代	長峰丘陵の沢を望む斜面
上野	3	49	縄文時代	千曲川河岸の底丘陵上全面
小泉	4	144	縄文時代	長峰丘陵に接した舌状大地　低湿地に接続
柳町	2	7	縄文時代	外様平に接する長峰丘陵上
針湖池	11	38	縄文後期	本報告
有尾	11	16	縄文前期	長峰丘陵南端の千曲川河岸段丘
須多ケ峯	11	0	縄文中期	外様平を望む台地上
計14遺跡	51	325		

表５　飯山地方の落とし穴と推定される遺構出土遺跡一覧

鳴沢頭Ⅰ遺跡（図23）は、通称岡山上段地域で、高原状の台地であるが小さな低湿地や台地など複雑な地形となっており、周辺の新堤・トトノ池南・休場・下境大原遺跡などとも似た環境である。本遺跡は通称「鳴沢」の低湿地を望む斜面に遺構が構築されるが、焼土やロームマウンド、落とし穴と考えられる土坑のみで住居などは確認されなかった。遺物は、押型文土器・沈線文などの早期土器および前期諸磯～前期終末期の土器が発見されている。

落とし穴は長方形の土坑で、坑底に一カ所の小穴が認められるものである。斜面上部から低湿地に向かって規則正しく並ぶものもある。トトノ池南遺跡では長方形土坑が等間隔に並んでおり、周囲より押型文土器が検出されている。

南原・屋株・上野遺跡は、千曲川河岸の段丘・丘陵地に立地している。このうち、南原・屋株は千曲川東岸にあって、両遺跡の間には境沢と呼ばれる谷状地によって分けられる。発見された落とし穴は、長方

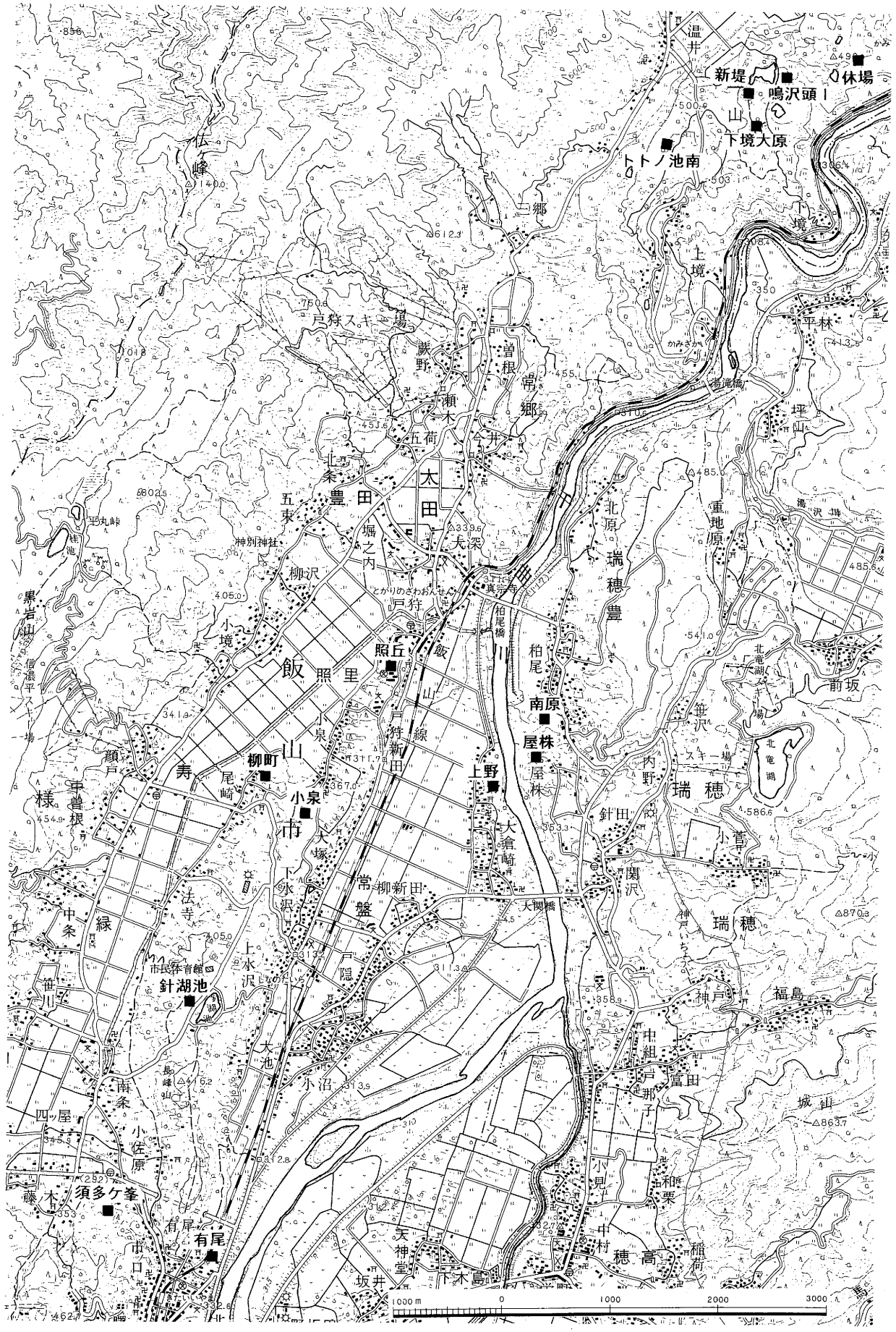


図23　飯山地方縄文時代落とし穴出土遺跡（1：50,000）

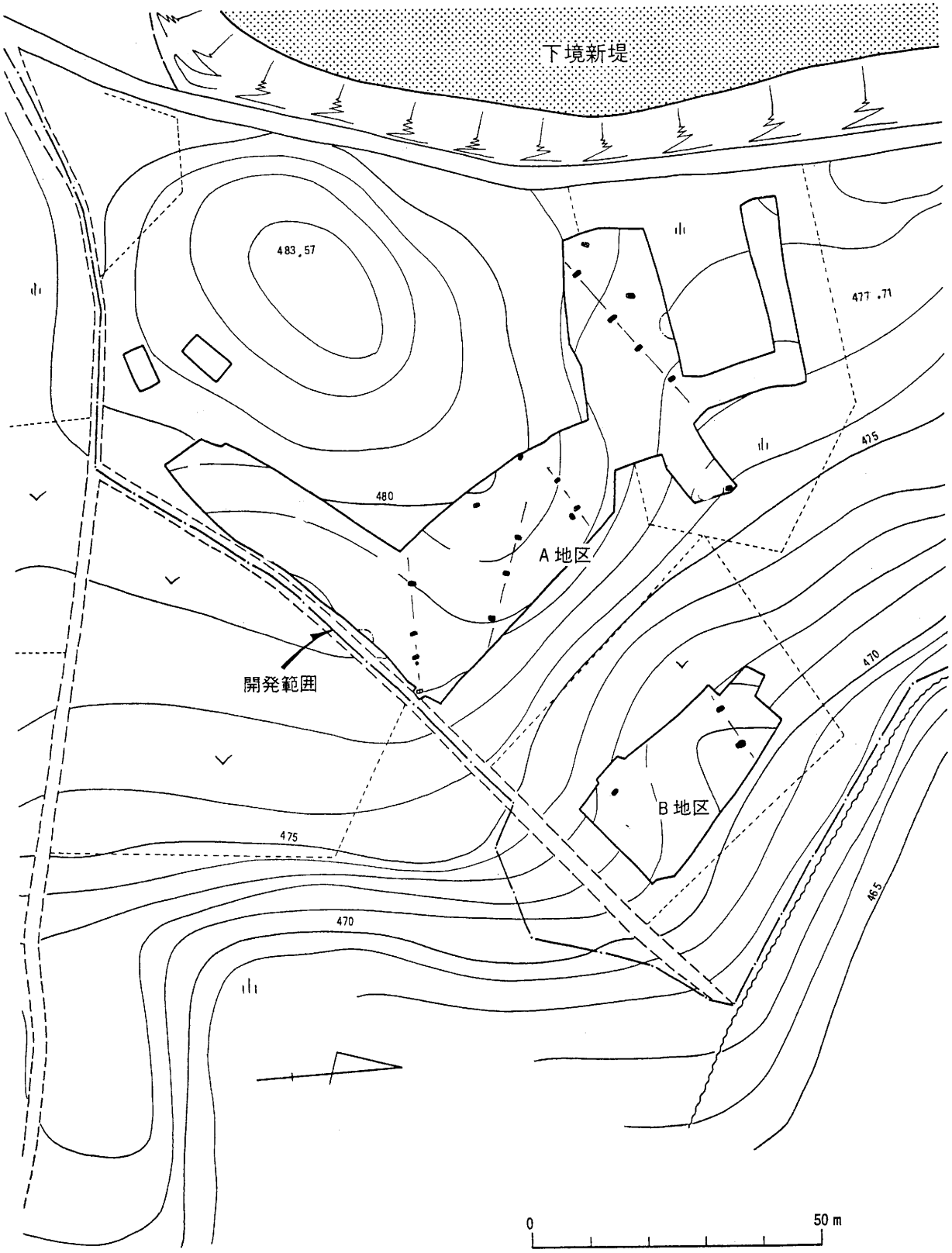


図24　鳴沢頭Ⅰ遺跡落とし穴配置図（1：1,000）

形の土坑のほか溝状の土坑も出土している。また、上野遺跡は過去10回にも及ぶ調査によって、溝状土坑が上野丘陵全体に列をなして構築されていることが分かってきた。このほか、須多ケ峯遺跡では方形土坑が等間隔に列をなして検出されている。

小泉遺跡は弥生時代の遺跡として知られているが、小丘陵全体に縄文時代の溝状土坑が発見されている(図25)。丘陵地より低湿地に列をなして続いていくことが明確に確認されている。

このように、方形土坑でも溝状の土坑でもいくつかがまとまり、列をなして構築されていることが分かってきている。そして、それらは台地の上から低湿地へ線として続くようなあり方だと考えられる。この点については、溝状土坑の方がより明確に現れている。

図25　小泉遺跡落とし穴配置図（1：1,000）

第４章　まとめ

長峰丘陵は、弥生遺跡の宝庫である。遺跡の存在が、学会に初めて報告されたのは、明治29年のことであった。その後、外様地区の北沢量平、栗岩英治氏等によって、弥生時代の土器、石器が多量に採集され、地元の外様小学校に寄贈された。

昭和12年、これらの石器は、「千曲川下流長峰・高丘の弥生式土器」（考古学８の８）として藤森栄一氏によって報告されている。現在、これらの遺物は一括飯山市埋文センターに保管されている。

第二次大戦後、森山茂夫氏を中心とする飯山北高等学校郷土研究会によって、主として東長峰丘陵の調査が行われ、弥生時代の住居址や土器等が多く発見された。これらの調査には、宮坂英式、神田五六、酒詰仲男氏等の指導があった。

昭和30年代前半には、神田五六、桐原健氏によって柳町遺跡が調査されている。東長峰、柳町両遺跡の調査の結果は、桐原健氏によって、「北信濃長峰丘陵における弥生遺跡」（考雑45の1）にまとめられている。

昭和63年、平成２・３年には、小泉遺跡の調査が行われた。この調査は、工場団地造成のための事前調査であり、約８万㎡の広大な面積であった。この調査で、旧石器時代の遺物や弥生中期の住居址群、莫大な数の木棺墓群、弥生後期の住居址群の発見など多大な成果を収めることができた。また、平成４年照丘遺跡の調査、平成６年農道敷設に伴う柳町遺跡の調査が行われ、それぞれ大きな成果があった。と同時に長峰丘陵上の多くの遺跡が消失し、景観も大きく変ってしまったことも事実である。

以上が、長峰丘陵上における今までの調査の概略である。ここで気がつくことは、従来の調査は長峰丘陵の北半分に偏っており、南半分については全くといってよいほど調査が行われていない。その理由は、遺跡は西長峰より北部に限定されており、南半分には有尾古墳群以外遺跡は存在しないと単純に考えられていたからである。

針湖池周辺に、遺跡の存在が確認されたのは、昭和40年代後半である。飯山北高等学校地歴部ＯＢ会が、飯山地域の遺跡の詳細分布調査の結果判明したのである。針湖池周辺には、旧石器時代、縄文時代草創期、早期、前期、平安時代の遺跡が存在する。その後、池の北岸に縄文後期の遺跡が存在することを知った。

針湖池は、その昔針尾池といわれ、その成立についての伝説もいくつか残されている。池は、面積約５ヘクタール。湧水は２本あるといわれている。いつ頃湧水を貯え、丘陵下部の水田の用水として利用したかは明らかでないが、室町初期にはすでに利用されていたという。そして、江戸時代にはたびたび、修理、修築が行われたという（村史ときわ）。

針湖池は、風光明媚の地として知られ、江戸時代後期、文人墨客が多く訪れたという。

さて、今回調査の対象となったのは、池の西側の丘陵地である。この地点は、今までの調査では遺物がほとんど発見されない場所であった。調査の進行とともに、私達を驚かす遺構が次々と発見された。

今回調査での成果の第一は、縄文後期に構築したと考えてよい細長い溝状の土坑が多数発見されたことである。この溝状土坑（以下ＴＰと称す）は、落とし穴として利用されたものであることはいうまでもない。今回の調査で、池畔から西に向って３本のＴＰ列が発見された。３本のうち、ＴＰ１・３は地層の条件、調査日数の制約があり、明確にすることはできなかった。けれども、池畔から丘頂部に向って構築されていることが、充分に予測できる状態であった。

ＴＰ列２は、圧巻である。池畔に近い部分から、丘頂部に向って110mの長さをもっている。このような長大なＴＰ列は、誠に珍しい例といえるであろう。ＴＰ列２は、更に調査区外の丘頂に向って延びていると考えられるから、果たしてどの位の長さになるか今の所想像できない。そして、このＴＰ列２は池畔

に近い部分で、３列に分岐している。ＴＰの間隔は一定でないが、見事に池畔から丘頂部に向って構築されていることは、縄文後期の狩猟の一つのあり方を知る上で、きわめて重要な資料となるであろう。

成果の第二は、弥生後期の円形周溝墓と方形周溝墓の発見であろう。円形周溝墓は、三基発見されている。周溝内よりの遺物出土は少量であるが、いずれも弥生後期の土器である。飯山地域では、弥生後期の円形周溝墓の発見は初めてである。今後、飯山地域の弥生後期の墓制を究明する上で、貴重な資料といえよう。主体部は、破壊されており、どのような規格をもっていたか判らないのが残念である。

方形周溝墓の発見は、一基のみである。飯山地域で、弥生後期の方形周溝墓の発見は、これで二例目となった。この周溝墓も主体部が破壊されていて、どのような形態をもったものかは不明である。

さて、円形周溝墓と方形周溝墓という形態の違った墓が、同じエリアで発見されたことは、どういう意味を持っているのだろうか。構築年代の差として、把えるべきであろうか。ただ、わり合い関係もなく、出土土器も極めて少量であり、新旧の比較も容易でない。今後の研究課題といえよう。従って、ここでは円形周溝墓と方形周溝墓が、共に発見されたこと記すだけにとどめようと思う。

今回発見された周溝墓の近辺には、今の所弥生後期の遺跡は発見されていない。北方約500mほど距てた地点に、西長峰遺跡が存在する。西長峰遺跡には、弥生中・後期の土器片が濃密に分布する。居住空間を離れて、墓域が設定されたのであろうか。これも今後の研究課題といえよう。

当初、ほとんど注目しなかった場所で、今回のような重要な発見があった。長峰丘陵には、何が埋れているか判らない。今後、遺跡地に指定されていない場所であっても、工事等が行われる場合には、きちんとした調査を行う必要があることを我々に教えてくれた、貴重な教訓的調査であったというべきであろう。

今回の調査も、調査月数の制約やその他種の制約がつきまとい、充分な調査が行われずに悔いを残す結果となってしまった。かえすがえすも残念というほかあるまい。

終りに、種々とご指導賜った方々および酷暑の中、献身的に調査に協力いただいた作業員の皆さまに心よりお礼を申し上げる。

写　真　図　版

写真１　針湖池遺跡近景

写真２　発掘調査（弥生時代周溝墓）

写真３　発掘調査（縄文時代溝状土坑）

写真４　現地見学会（1998年７月10日開催）

写真５　溝状土坑の調査

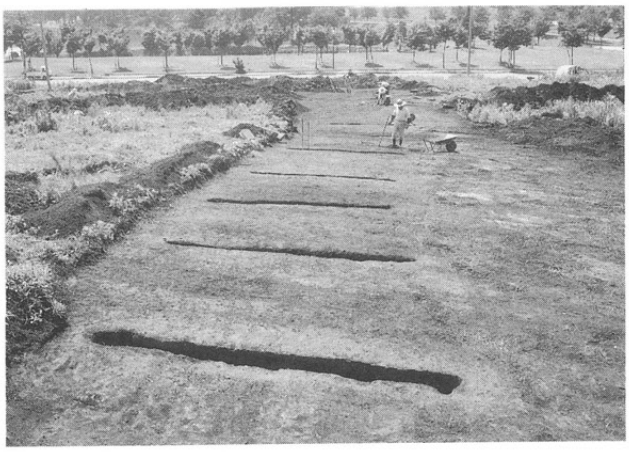


写真６　溝状土坑配列状況（TP列２）

写真７　１号土坑（SK１）

写真８　４号土坑（SK４）

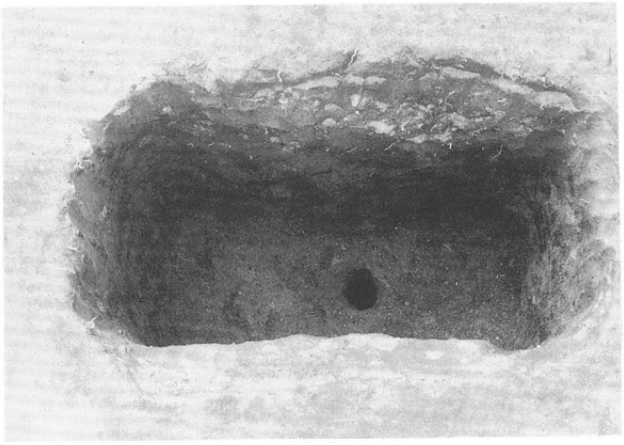


写真９　７号土坑（SK７）

写真10　９号土坑（SK９）

写真11　溝状土坑列２（TP列２）空撮

写真12　周溝墓群の調査（SD１・SD２）

写真13　円形周溝墓（SD２・３）

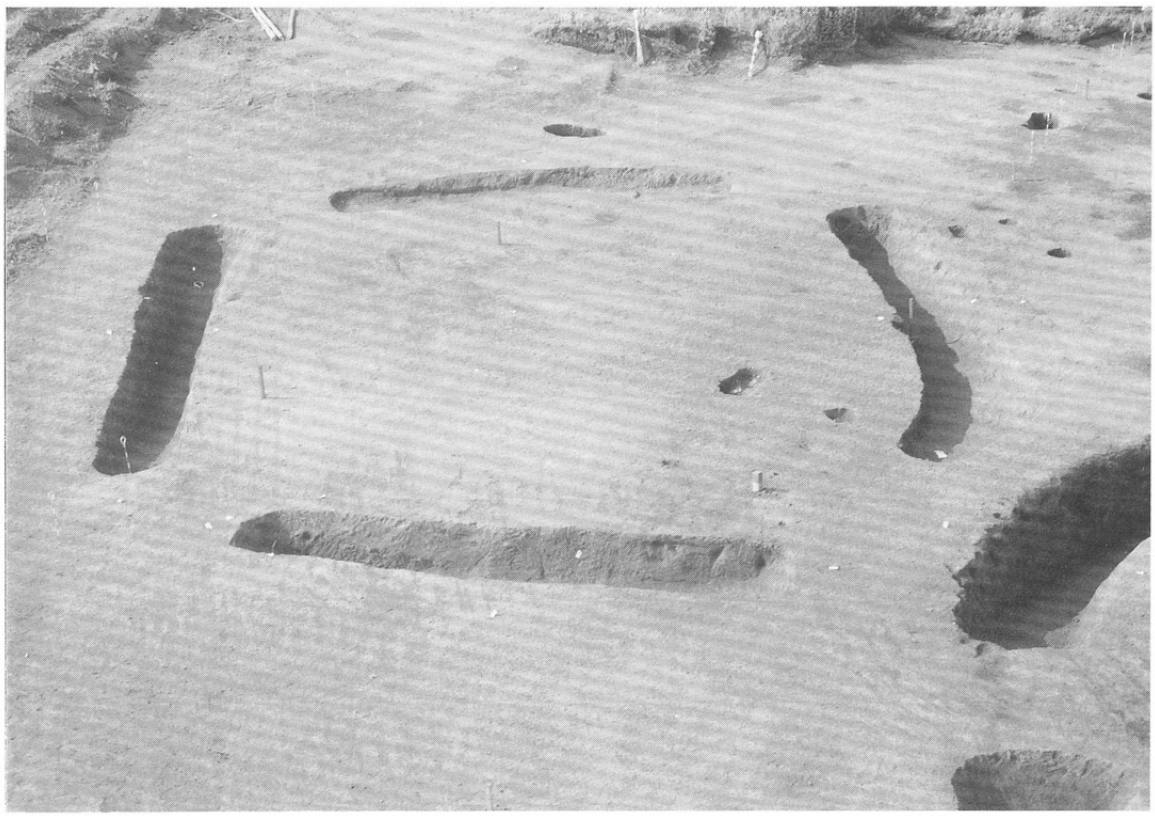


写真14　1号方形周溝墓（SD１）

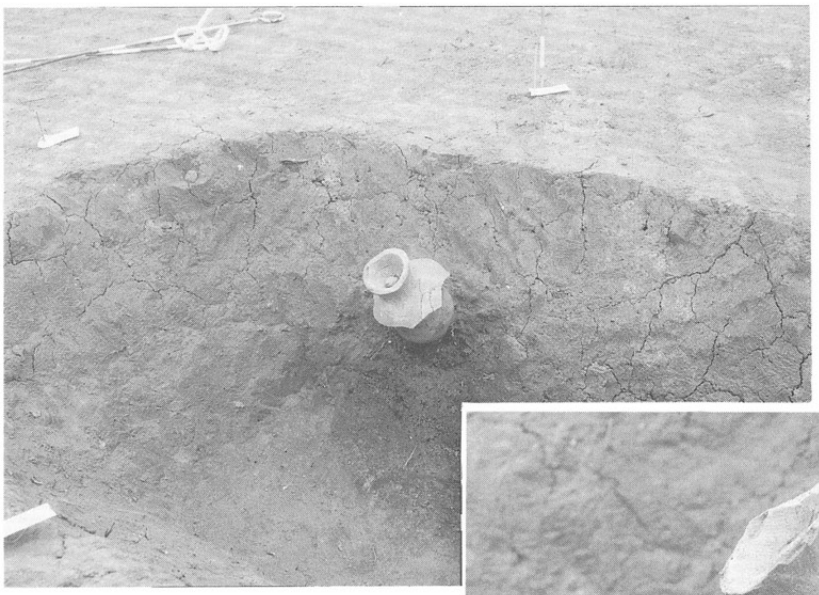


写真15　SD１第3溝内土器出土状況

写真16　SD１第3溝内土器出土状況

写真17　1号円形周溝墓（SD 2）

写真18　調査風景

写真19　SD 2 第 3 溝内土器出土状況

写真20　出土遺物　（１～４　１号方形周溝墓ＳＤ１　・　５　１号円形周溝墓ＳＤ２）

飯山市埋蔵文化財調査報告　第59集

針湖池遺跡発掘調査報告書

平成11年３月１日発行

編集・発行　長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1

印　　刷　㈲足立印刷所